

都留文科大学報

第112号

2010年
3月23日(火)

編集 都留文科大学広報委員会

〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 都留文科大学内
☎ 0554-43-4341 URL : <http://tsuru.ac.jp/>

さよなら文大 二教員が退職 …………… 2

都留山賛歌 ―輝いて過ごせた11年― 笠原十九司教授
教師の道を選ぼうとする学生たちの
強く深い学習要求にふれて 田中孝彦教授

おくることば …………… 4

初等教育学科 相守光恵教授／国文学科 加藤静子教授
英文学科 Eloise Hamatani 教授
社会学科 中益陽子講師／比較文化学科 重富恵子講師
大学院比較文化専攻 鳥居明雄教授

旅立つ言葉 …………… 8

初等教育学科4年 佐藤英恵／国文学科4年 内田小雪
英文学科4年 加藤亜有未／社会学科4年 甲斐寛斉
比較文化学科4年 伊井 茜
文学専攻科教育学専攻 河本文香
大学院文学研究科
国文学専攻 鈴木彩子／英語英米文学専攻 佐藤健司
比較文化専攻 島津創太／社会学地域社会研究専攻 宮崎友靖
臨床教育実践学専攻 吉江昭子
平成21年度卒業生・修了者予定数

卒業論文・研究論文・修士論文一覧 … 16

初等教育学科・国文学科・英文学科・社会学科
比較文化学科・文学専攻科・大学院文学研究科

講演会だより …………… 28

地域交流研究センター・現代GP共催第6回地域交流研究フォーラム
国文学科・国語国文学会共催 秋季講演会
英文学科・英語英文学会共催 秋季講演会
大学院英語英米文学専攻・英文学科共催 講演会
社会学科・地域社会学会共催 後期講演会
比較文化学科・比較文化学会共催 講演会
ジェンダー研究プログラム主催 講演会

遠隔教育授業・交流プログラム …… 37

遠隔授業、総合的な学習「影絵をつくろう」の実施

文大だより …………… 38

卒業演奏会を終えて／卒業制作展を終えて …… 38～39
都留文科大学音楽教室コンサートシリーズNo.25 … 40
学生表彰制度を創設 ―2団体と3名を表彰― …… 41
本学「学生チャレンジプロジェクト」によるJazz Trainが運行 42
山梨の魅力メッセンジャー 68名に認定証交付 …… 42
文大名画座／キャリアサポート室主催学内合同企業説明会開催 43
国立科学博物館主催「大哺乳類展」へ本学協賛 …… 43
本 ぶんだい堂／インフォメーション …… 44
編集後記…高橋宏幸 …… 44



第6回地域交流研究フォーラム



第43回卒業演奏会（初等教育学科 音楽専攻）



卒業制作展（初等教育学科 美術専攻）



学内合同企業説明会

さよなら文大 二教員が退職

今年の3月で、笠原十九司教授（比較文化学科）、田中孝彦教授（初等教育学科）が、惜しまれながら退職します。笠原十九司教授は定年退職となり、田中孝彦教授は4月から、武庫川女子大学 大学院臨床教育学研究科に移る為、退職となります。

お二人とも本学の発展ためにご尽力くださり、ありがとうございました。

都留山賛歌 ―輝いて過ごせた11年―

比較文化学科教授 笠原十九司

私はこれまで3回職場を替わりました。東京大学教育学部附属中学校・高等学校での8年間、宇都宮大学教育学部での20年間、そして都留文科での11年間です。生涯の最後の職場に都留文科大学を選べたことは、山好きの私にとって、目を輝かせてすごせた日々でした。

私は都留文科大学前駅の改札口を出ると、大勢の人がオギノ脇の近道を行くのとちがって、右に折れて、桔梗屋東治郎の前の道を歩きます。西やや正面に屏風のように聳える三ツ峠山に向かって「お早う」と挨拶し、道を南に折れて、地元で「ケツ山」といっている赤ちゃんのお尻のような文台山の頂上が見えると「今日もよろしく」と挨拶を

します。

私の研究室は文大の先生の中なかでおそらく一人だけではないかと思いますが、机が窓の外を向いていて、座ると正面に文台山の山壁が見えます。講義やゼミを終えて机に座り、四季折々に装いを変えていく山の容姿を眺めるのは至福の時間でした。

新学期が始まった頃の好天の午後、山裾に広がる杉林から花粉が黄色い炎をなつて天空に昇っていくのは圧巻でした。前期が終わるころ、餅となつて沁みとおる蛹の声には癒されました。秋の文台山は紅葉の錦に彩られ、都留の山々もすべてが艶やかにみえました。冬の紺碧の峰空を白い雲がのんびりと流れていくのを飽かず眺めていると、落ち着くことができました。

一日の授業を終えて帰る時、私は都留文科大学前駅のホームの西端に立って、夕映えに染まる三ツ峠山に向かって「さようなら」と挨拶し、お尻の



笠原十九司教授

部分が残照に明るい文台山に向かって「また明日」と挨拶をしてから、電車の最後部に乗りこみ、文大での一日が終わるのでした。私のゼミでは、春の新入生歓迎登山と暮の忘年登山と年2回、都留の山々に登ってきました。学外研究の1年を除いて計20回、文大から見える山はほぼ登りつくしました。やや演歌めきますが、私ほど都留の山を愛した者はいないのではないのでしょうか。私が山を愛する理由の一つは、人は裏切ることがありますが、山や自然は裏切ることがないからです。

我が人生最後の職場となった都留文科大学で、畏敬する先生方とともに仕事ができ、意欲的に学ぼうとする素晴らしい学生と邂逅できたことの幸運をかみしめ、私を親切に温かく助けてくださった事務局職員の方々へ、充実した11年間を過ごせたことの感謝を申し上げたいと思います。



鶴ヶ鳥屋山頂にて ― 笠原ゼミ新入生歓迎登山

さよなら文大 二教員が退職

教師の道を選ぼうとする学生たちの
強く深い学習要求にふれて

初等教育学科教授 田中孝彦



田中孝彦教授

「甘えてくるかと思えば、ひどい悪態をついたりする子どもに、とまどっている。『攻撃』と『依存』を複雑に交替させる子どもたちの姿に、自分自身が傷ついてしまうことがある。」「出会いを重ねるうちに、子どもが成長の過程で遭遇してきた『問題』の大きさや負ってきた『傷』の深さと、傍にいてほしい、遊んでほしい、話を聴いてほしいという気持ちに気づくようになった。」「結局、それしかできないのだが、子どもの話を聴いているだけになってしまっているような気がする。学生である私が、この子に何をしたらよいか、何ができるか迷うことが多い。」「ようやく少し落ち着いて話をするようになってきた子どもを、ただ教室・授業に戻すことがよいことかと、疑わしくなるときがある。この子にとって意味のある学習とはどういうものかという問いが湧いてきた。」「とまどい、迷い、疑い、問いを、先生方と相談したいが、今の学校現場の忙しさのなかでは、なかなか相談しにくい。」

ここ数年、初等教育学科の臨床教育学コースでは、「臨床教育学フィールドワーク」(SAT-C)の一環として、学生・大学教員・市教育委員会スタッフらが参加して月一回のペースで、「子ども理解

の学生カンファレンス」が重ねられてきました。これらは、そのなかで出された学生たちの声です。こうした学生たちの声を聴いて、私は、彼らが、今日の子どもたちが生育の過程で抱えてきた問題の重さと、教師の仕事の大変さを相対的にリアルに認識しており、自分が教師に向いているか、教師を続けていけるかということを探いながら真剣に考えており、今日の子どもについての理解と教師の専門性についての本格的な学習を強く求めていることを実感してきました。同時に、学生たちが、子どもと直接に交わる体験のなかで実際に感じたとまどい・迷い・悩み・喜びを、ありのままに表現し、他者に聴きとられ、じっくり反芻し言語化し、実習的学習と理論的学習とをつないでいく、このような「カンファレンス」的な学習の持つ意味の大きさを感じ、それを教師教育のカリキュラムに位置づける必要があると考えようになってきました。

ここでは「カンファレンス」的学習のことにに関してしか述べられませんが、都留で働いた7年間を通して、私は、教師の道を選ぼうとしている学生・大学院生たちの迷いを含んだ強く深い学習要求に直接ふれることができました。そ

して、「子ども理解」と「学習指導」を相互補完的な二つの柱とし、講義・実習・カンファレンス・ゼミナール・論文制作などを有機的に関連づけた、教師教育の全体的なカリキュラムを創り出していくことが、時代の課題になっていると判断するようになりました。

私は、この4月から、兵庫県にある武庫川女子大学の大学院臨床教育学研究科に移りますが、この間に学んだことを生かして、子ども理解と臨床教育学の研究・教育を継続していければと思っています。刺激に満ちた面白い仕事の機会を与えてくださった都留文科大学の学生・教職員のみなさん、都留の地域のみなさん、ありがとうございました。



卒業に寄せて

初等教育学科教授
相守光恵

皆さん、ご卒業大変におめでとうございます。

はじめて親元を離れ、都留という未知の世界に飛び込んだ1年生。一人ぼっちで下宿をし、講義や友達作りに必死だったあの頃を懐かしく振り返っていることと思います。私たち担任も新しい気持ちで、未来に夢と希望とやる気を漲らせた皆さんが、どうか無事故で充実した大学生活を送り、きちんと卒業して行ってほしいという思いで見守ってきました。緊張と不安の顔がとても美しく見えたが、どこか幼さの残る様子に心配をしたりフォローが必要だったりしました。しかし、4年生になり時々道で出会う顔が、強く逞しくすっかり大人に変身している様子に、人間の顔とはこんなにも変化するものなのかと驚かされるとともに感動しています。

この都留の中で、どれほど多くの人と出会い接点を持ち、学問や仲間たちから啓発を受けてこられたのでしょうか。人が育っていく中で一番大切なことは何かから影響を受け、

おくることば・旅立つ言葉

教員から・卒業生から・修了生から

何から啓発を受けたかということではないでしょうか。多くの人間の中で助け合い、励ましあい、もまれ、上に立ちリーダーシップをとってきた日々の積み重ねのなかから精神的な自立を勝ち取ってきたのだと皆さんの顔を見ていて感じます。

それぞれが都留文科大学で過ごした数年間を人生の原点として、これからは社会の一員として貢献的人生を送って行ってほしいと願っています。時には思うにまかせぬ境遇に陥ることもあるとは思いますが、数年たってみ

れば小さな水溜りであったことに気付くものです。どうかあせらず自分らしい人生を、新しい出会いの中で見つけていってください。

最後に、皆さんを信じて遠い都留に送り出してくださったご両親、ご家族への感謝の気持ちを忘れないでくださいね。



1年生オリエンテーション 富士急ハイランドにて

ご卒業おめでとう

—贈りたい言葉—

国文学科教授
加藤静子

ご卒業おめでとうございます。たった一年の卒業時期の違いに、どうしてこんなに就職受け入れに差があるのかと、溜息まじり否応なしに卒業を迎えた方もいらっしゃるでしょう。でも、どんな立場にあったとしても、卒業後のこれからが真の人生の始まりです。長い人生です、いろい

ろな希望をどうぞ持ち続けていって下さい。希望を持つことが、人には最も大切だと言われてますから。

今この混迷の時期にどんな言葉を卒業生に贈ればよいのかと迷いました。教育に生涯を捧げた先人の言葉を紹介したいと思います。女性教育者であったその人は、「心配」の第一義は、「親に心配かけるな」のような意味ではなく、「他人に心配りせよ」であり、「心くばり」の大切さを言い続けたそうです。

卒業生や若い人達の本音を聞きますと、職場には考えら

卒業生におくることば

To the Graduating Seniors,



英文学科教授
Eloise Hamatani

For much of your lives that you can remember, you have been students. Now, you are graduating and will take your places as full members of society. That transition is both very exciting and quite frightening; it is one that you have been planning for and anticipating for a long time. But the last four years have not been only a time for waiting, planning and preparing. They have also been a time of change and growth, learning and experience, a

time somewhat apart from the regular stream of your lives.

As you continue on the way you have chosen to travel in your life, you will often discover, here and there along the way, things that you have learned or experienced during these four years. Not necessarily things you have pushed into your brain before tests, although they might be. Actually, it is more likely that they will be unexpected things, like when you see or hear something and you are reminded of something fleeting. Like seeing a patch of violets on a hillside in Spring might bring to mind a passage from a novel you read, enriching

the view you have before you with the words of the novelist or a vision of the characters. Upon seeing a bird, you may be able to classify it and remember information about it that makes the bird seem more alive and beautiful to you. Art exhibitions, theater, and music are deeper and richer because of what you learned and experienced during university. And later in life, you will find that almost everything you do has connections reaching back to these four years. But they may not be to the "practical" things that you have learned at university to help you do a better job. You may find that the most rewarding and the most lasting are what you thought at the time to be insignificant or even unimportant. University is a time when seeds are planted in your minds that will sprout and grow like flowers over the rest of your life, giving your life more beauty and sparkle because of their existence.

Congratulations on your graduation, and may your lives be richer for your university life.

れない理不尽な状況があるらしく、そういう場での「心配り」なんてナンセンスと思われるでしょうか。どんな時にも他人に心を配ることが大切であるのは、他の人に心を配るとは、自分の心で働きかけていくことであり、自分が確立していなければできないことだからです。自己確立の重要性を投げかけた先人の言葉と思われまふ。

むろん自己確立など一朝一夕にあるはずもなく、傷つき躓き何度も立ちあがって、長い時間をかけて達成するものです。宣長が学問の道に言及

した次のようなこと、それが卒業時の今、これからどんな道を歩むにしても皆さんに必要とされることでしょう。

詮ずるところ学問は、ただ年月長く倦まず怠らずして励みつとむるぞ肝要にて、学びやうはいかやうにてもよかるべく、さのみ関わるまじきことなり。いかほど学び方よくても怠りつとめざれば、功はなし。…才不才は生れつきたることなれば、力に及びがたし。されど大抵は、不才なる人と言へども、怠らずつとめだにすれば、それだけの功は有るもの也。

卒業生におくることば

ご卒業、おめでとうございます



社会学科講師
中益陽子

私事になりますが、いまだに大学や大学院を「卒業できた」という気持ちをあまりもてません。理由は3つあります。

1つ目は、博士論文を書かないままに、この大学に就職してしまったからです。時間は十分ありましたから、論文を書けなかったのは私の能力や努力の不足のためですが、後悔しています。やるべきことをやらなかったことでうしろめたい気持ちがあるため、自宅と同じ都内にあるにもかかわらず、母校には、卒業してから数えるほどしか足を踏み入れていません。また、指導教官と会っても、（目を合わさずに）オリンピックの話なんかをするわけです。もし今20代の自分が目の前にいたら、「いいから、論文を書け」と言いたいところです。ただ、あのころの私は今よりもさらに未熟でしたから、言っても分からないにちがいません。

この点、卒業論文を書き上げたみなさんは、私のような意味では、大学生活に対する心残りもなく、また、書けなかったことについて自分にも他人にも言い訳をせずに堂々と生きていけるわけですから、どうぞ自信と誇りをもってください。

2つ目は、当たり前ですが、

「学び」に終わりはないということです。私の場合、仕事として研究職を選んだことで、なおさらそのように感じるのかもしれませんが、この道理は研究職以外の者にも普遍のように思えます。大学卒業自体が、学びにとってそれほど大きな意味をもたないということは、次のような人々の言葉からも分かります。「あと10年、いや5年永らえたい。そうしたら本当の画家になれるものを。」（葛飾北斎、88歳臨終の言葉）、「『義太夫』の修業は一生では足りなかった。もう一生欲しかった。」（4代目竹本越路太夫、76歳引退の言葉）、「あした、来週、新しい映画がくるかと思うと、死ねない。」（映画評論家の淀川長治）。ざっと思い出したものを挙げてみました。おそらく、一芸を成した人というのは、まさに自身の成長ゆえに現在の自己に常に不満

であり、その不満が学びへの原動力となり、その人を一層の高みへと押し上げていったのではないのでしょうか。

こんな時代に精一杯生きているみなさんに、さらに追い打ちをかけるようで心苦しいですが、それでも言うておかねばならないのは、「頑張れ、いつか死ぬ」（芥川賞を受賞したミュージシャンの川上未映子）、です。

さて、最後の3つ目。実は、私は、大学の卒業式のその日に、卒業証書をどこかに忘れてきてしまいました。卒業証書といった紙切れなどなくても、卒業は卒業なのですが、上記の通り、卒業できた気分になれない人間にとっては、免罪符みたいなものです。みなさんは、くれぐれもなくさなくないようにしてくださいね。

ご卒業おめでとうございます。みなさんのこれからの人生を大切に生きてください。

学年担任から



比較文化学科講師
重富恵子

皆さん、ご卒業おめでとうございます。

この四年間、学年担任として皆さんに関わってきました。山中湖畔での新入オリエンテーション時、不安と期待で一杯だった初々しかった頃の皆さんを懐かしく思い出します。一年後にはオリターとして新入生のための案内役を

卒なくこなし、そして二年次生の冬、所属ゼミが決まり大学生らしい知的探求が本格化していく頃には、段々と幼さがその容貌から薄れていったことを頼もしく思っていました。自分は何を深めていくのかという課題に向き合う中で、そして就職活動を展開する中で、本当に大きく成長したと思います。

とはいえ、これからが本舞台。

これまでは、誰かに保護され配慮される中で用意されたセットメニューを消化していたればよかった。でもこれから

卒業生・修了生におくることば

「語ること」と
「語りえぬこと」

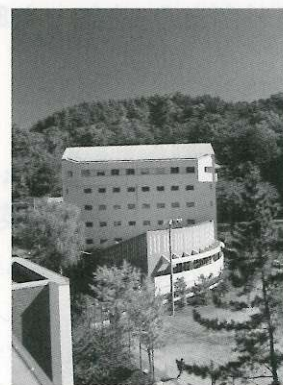
大学院
比較文化専攻教授
鳥居明雄

大学院修了、おめでとうございます。以下に日頃の想いを記すことで将来へのはなむけにしたいと思います。

ことばの学徒であることの証明として、「思考を重ね、言葉を獲得する」ことが求められるのはいうまでもありません。流通する言葉を拠り所として思考を重ね、そこに生まれた思考が新たな言葉を産出するという、思考と言葉のわたりあい（互酬性）がもっとも緊要な課題となっているわけです。言うまでもなく、わたしたちは言葉で思考し、語ります。出来事や現象や存在を言葉によって表し、他者に伝達します。発せられた言

葉が他者を通り抜けて再び自分に戻ってくる時、あらためて自分の思考と言葉の実質が確かめられるということになります。

しかし、言葉は出来事や現象や存在のすべてを伝え、表すことは不可能です。これは言葉を操る能力の問題ではなく、言葉自体に内在する問題です。どのように言葉で語り、伝えても、その出来事や現象や存在の総体に到達することは原理的にみてもありえません。つまり、言葉は、「語りえぬこと」を傍らにいつも携えながら発せられているものなのでしょう。煎じ詰めれば、「語りえぬこと」については、ついに沈黙せざるをえないということにもなります。このように、「語ること」というのは、語ることができることしか語りえない営みとして、ついにリアルに到達しえないという困難さに直面している



のです。

しかし、「語ること」が困難だとして、これを放棄するわけにもいかないのです。窮極的にみても、「語ことは困難でありつつ、同時に語らざるをえない」という桎梏にわたしたちは投げ出されていると思うべきでしょう。このいいようのない事態のなかで、わたしたちはひるむことがあってはなりません。ともに対話の輪を広げて、この桎梏に立ち向かっていくのが生の営みとしての根本的な価値であると思念します。

は与える側にまわります。同時に、自分の知らなかった数多くのメニューが存在することも知るでしょう。何を消化し、何を作り出すか、フリーハンドの人生です。その中で、工夫を凝らしたオリジナルを考案する、あるいはオーダーメイドで臨機応変に対応するなど、自分の力を発揮してください。

厳しい雇用情勢ですから、未だ冬の終わらない人もいます。身動きとれない時はじっくり自己投資する時と心得て力を養ってください。

社会で力を発揮するといっても、自分独りで何かを成すわけではありません。家族、友人、隣人、地域、職場、自治体、国家、世界と何層にも重なるネットワークの中で、自分の力を活かし発信していくということなのです。いきなりの大舞台を前に、期待よりも不安が大きいかもしれません。

そんなときは、ぜひ、この都留文大に入学した当時に思い出してください。日本全国そして国境を超えて来た人たちと出会い、

初対面だった同級生と友情を培い、共に学びあい今日の成果を手にしたことを思い出し、自信に変えて、これから新しいネットワークを広げる中で、自分を広げ高めていていただきたいと思います。



山中湖 宿泊オリエンテーションで、後輩の案内役を務めたオリター達

旅立つ言葉 卒業生から

「ありがとう」を知った時間



初等教育学科4年
佐藤英恵

5年という、少し長い年月を都留の街で過ごしました。必死に自分の弱さと向き合った日々だったように思います。「絶対に教師になる」「教師にならなければいけない」、そんな強い決意を持ってスタートさせた大学生活。自分の未熟さや、周りのぬるさ・甘さ、置かれた環境…自分を取り巻く全てが嫌になり、反発し、ひたすら強くあろうともがき続けていました。前へ前へ向かおうとする意識のとは裏腹に、心や体が悲鳴をあげ、パンクした時期もありました。きっと私の人生で最初で最後だろうと思います。逃げ出したこともありました。その時、ある方からの「よくここまで頑張ったよ!!」という力の込められた言葉に、どれほど救われる思いがしたかわかりません。

今日までの時間の中で、私は人として教師として生きていくためにかけがえのないものを学び、手に入れたのだと感じます。大切な人たちをたくさん泣かせました。私も散々泣きました。「ありがとう」という言葉の意味と温もりを知りました。たくさんの「愛」に守られていること、たくさんの「想い」に支えられていることを知りました。人は「生かし生かされながら」

生きていることを知りました。傷みを知った分、苦しみぬいた分、強くたくましくなりました。痛みを知った分、弱さを知った分、優しくなりました。心から笑っていただける今日が、ふと見上げた空を綺麗だと思える今日が、どれほど「幸せ」に満ちたものであるかを知りました。私はとてつもない幸せ者です。

苦しかったが、決して悪い時間ではありませんでした。この先もっと器用には生きられないだろうし、だいぶ泣き虫にもなりましたが、それも私らしさなの

だと思います。走って走って。今、ようやく辿り着いた場所は「夢へのスタートライン」です。たくさんの「ありがとう」を胸に、私は私にしか伝えられない言葉を、熱く楽しく全力で、これから逢う多くの子どもたちに語っていただきたいです。



音楽専攻 卒業生 秋のコンサートにて

道



国文学科4年
内田小雪

大学での4年間は、私にとってこれから進むべき道を考え直す時間でした。私がこの大学で学びたいと思った理由は、自分の好きな国語をもっと知りたい、もっと学びたいと思ったためと、将来の夢であった図書館司書の資格を取得するためでした。

しかし、教職課程を取り、教育のことを学んでいくうちに教育することの面白さを知り、教育に興味を抱き始めま

した。そして、3年次での教育実習が私の人生を変えたと言っても決して過言ではないと思います。実習をするうちに、いつの間にか、学校に行き生徒たちの笑顔を見ることが楽しみになりました。授業を通して生徒たちと交流すること、言葉を学ぶことの面白さを教えることが、非常に魅力的であることを知り、私はその魅力にすっかり取り付かれてしまいました。

教育実習を終えて、私は自分がこれからどこに向かって行けばよいのか悩みましたが、やはり教員になってまた生徒たちと関わり合いながら、一緒に成長したいと思い

旅立つ言葉 卒業生から

旅立ちのことば



英文学科4年
加藤亜有未

大学生活を振り返ると、あっという間だったが、中身が濃く、とても充実した4年間だった。今、心から思うのは都留に来てよかったということだ。娯楽が少ないため、集中して勉学や部活動に励むことができた。多くの学生が一人暮らしをしているため、常に仲間がそばにいて安心できた。友達やゼミ生の中には家族のようなあたたかさがある。また、都留には全国各地から学生がきているため、今まで当たり前だと思っていたことが自分の地域だけのことだったり、今まで知らなかつ

た文化にも触れることができた。そして、地元を離れたことで地元のよさを感じることができた。

「英語教師になりたい!」という思いを持って進学したにもかかわらず、自分の将来について悩んだ時期もあった。しかし、教育実習を通し、楽しいだけでなく、辛いことや大変なこともあるが、たくさんの感動のある職業だと実感できた。教員採用試験を受けるにあたり、不安やプレッシャーに押しつぶされそうになり、何度もくじけそうになった。しかし、教育実習先の子ども



大好きな浜谷ゼミの仲間たちと

たちとの写真や手紙を見ると自然と笑顔になれ、がんばることができた。また、一緒に勉強してきた友達やゼミ生がいて、お互いに励ましあうことができたからこそがんばることができた。本当に多くの人の支えがあったからこそ、叶えることのできた夢である。

教育実習だけでなく、富士吉田市の小学校で外国語活動のボランティアもさせていだいた。月に1回や2回の活動ではあったが、子どもたちと会うと、たくさんの元気をもらうことができた。そして、中学校の英語教師になる私にとっては、学ぶことが多くあった。教育実習以外にも現場の教育に触れる機会を与えてくださったことに感謝したい。

4月からは大学で学んだことを生かし、「子どもたちに英語や異文化の楽しさを伝えたい」、「何らかの形で子どもたちに影響を与えることのできる教師でありたい」という思いを胸に、英語教師として地元の中学校の教壇に立ちたい。

ました。そして教員の道に進むことを決めました。4月からは、山梨県の中学校の教員として働かせていただくことになりました。これも支えてくれたゼミの佐藤先生、一緒に勉強し励まし合った仲間、応援してくれた友人と周りの人々、家族のおかげです。この場を借りて、感謝の気持ちを伝えたいです。

これから、大学4年間で学んだことを生かし、自信

を持って進んでいこうと思います。つまづくこともあるかもしれませんが、自分で選んだ道なので、自分らしく精一杯頑張っていこうと思います。



ゼミのみんなと先生

旅立つ言葉 卒業生から

卒業するにあたって



社会学科4年
甲斐寛斉

都留文科大学での4年間を振り返ってみて、公私ともに充実していたと思います。私が体育会に所属していた折、2年生から3年生まで鶴鷹祭で応援団をやっていました。そこで学んだことは、“何か一つのことを皆で協力してやり遂げることは素晴らしいことである”ということです。応援団の活動としては約2カ月という短い期間でしたが、そこで得た経験や仲間は、自分の中では忘れられない大切な糧となっています。

学問においても、私は素晴らしい教授や仲間巡り合えたと思います。私は、憲法ゼミに所属しているのですが、憲法のことについて友人と酒を交わしながら議論をし、また、先生からの指導等を通して何時も良い刺激を受けていました。また、ゼミでの学習を重ねていくうちに、広く多角的な視野で物事を見られるようになり、じっくりと考えられるようになりました。そういった活動の中で私は、教育実習で自分の学問に対する知識の浅さを痛感し進学をすることを決めました。部活動を引退してからの受験勉強だったので日程的にも余裕がなく大変でしたが、部活動で現役として活動していた約3年半で培われた根性と集中力で

無事に第一志望であった大学院に進学することが出来ました。しかし、進学出来たのは全て己の力ではなかったと思います。やはり、自分が精神的に弱気になっていたときに支えてくれた友人や両親、受験勉強で困っていた際、時には厳しく時には優しく丁寧に指導していただいた先生、同じ目標に向かって叱咤激励した仲間がいてくれたからこそ今の自分があると思います。

最後に、都留文科大学で私が得たものは、“絆”だと思います。不安や悩みなどの壁にぶつかった時、常に私の周りには頼れる友人や先輩、後輩がいました。そういった仲間達と時には互いの将来につ



横田先生と憲法ゼミの仲間たち

いて語り合い、また時には無茶なことをやったりと語りつくせないほどの思い出を作ることが出来ました。

私は、都留文科大学での学生生活での経験を糧にしてこれからの人生を充実したものにしていこうと思います。そして、将来私が教壇に立つ日が来たら、都留での学生生活を話してあげたいと思います。

本当にありがとうございました。

写真との出会い



比較文化学科4年
伊井 茜

私は1年次の春に写真部に入部しました。入部当初はカメラや写真に関する知識も何も持ち合わせていませんでしたが、どこへ行くにもカメラを持ち歩いたり、暗室にこもり夜通し手作業で写真を焼いたりする日々を送るなかで、写真に対する熱意が日増しに高まっていきました。

そうした写真漬けの日々のなかで、とりわけ印象に残っている二つの展示があります。一つは同学年の部員全員

で取り組んだ「都留文科大学写真部有志展」、もう一つは関東の大学の写真部員の合同サークルで創り上げた「学生合同写真展'08」です。有志展は、より多くの人々に自分たちの写真を見てもらいたいとの思いから、2009年3月上旬、甲府市の山梨県立美術館のギャラリーを借り、一週間の展示を行いました。初めての学外展示のため、宣伝や会場設営など何もかもが手探りでしたが、会期を通して延べ480名ものお客様にご来場いただくことができました。

また合同写真展には3年生の春から参加し、現在も活動を続けています。そこでは例会という、各々の写真を見て

旅立つ言葉 修了生・専攻科から

専攻科での1年間

文学専攻科
教育学専攻

河本文香

私が専攻科に進学しようと思ったきっかけは、知り合いの先輩の話を聞き、専攻科に進むのも選択肢の一つだと考えたことです。その頃の私は、地元の教員採用試験にむけて勉強していて、教員採用試験に失敗してしまったらどうしようか、もし、臨時採用として社会にでることになったら自分は働きながら勉強時間を確保し、教師になるための努力ができるのかななどの不安を抱えながら毎日生活していました。そんな時に専攻科の話を聞き、いきなり社会にでる

のではなく、1年間専攻科でしっかりと勉強するのもいいなと考え、教員採用試験の結果がでた後、専攻科を受験することを決めました。

専攻科に入ってから1年間はとても内容の濃い充実した時間を過ごすことができました。まず、前期は主に教員採用試験にむけての勉強でした。特に、勝俣先生の授業では教採への対策として授業で集団面接や模擬授業などの実践的な練習や教採に必要な情報や知識、それを裏付けるために小学校へ視察に行くなどたくさん学び、経験しました。また、石井先生の授業では作文指導や論作文をより濃い内容にするために1つのテーマについてみんなで話し合い、自分の考えをより深めていき

ました。

後期は、主に研究論文や授業を行うための教材研究に取り組みました。研究論文は、後期から本格的に取り組むため時間が少なく、とても大変だと感じましたが、限られた時間でも学ぶことは多かったです。また、専攻生それぞれが全く違った分野を研究するので、他の人の論文からも多くを学びました。

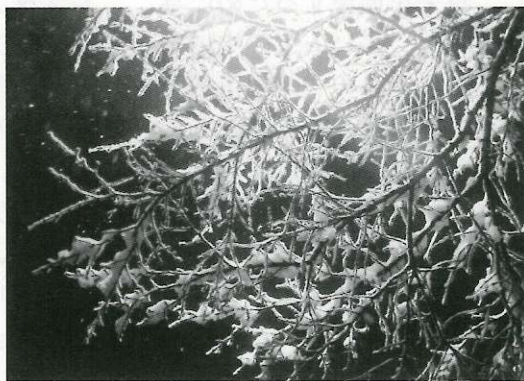
この専攻科での1年は、自分の人生の中で大きな分岐点だったと思います。それは、この1年が一番、教育とは一体何なのか、今の日本に必要な教育は何か、自分はなぜ教師になりたいのかということを実際に考えることができ、精神的に成長したと思える1年だったからです。学部時代の授業とは違い、人数が少なく、ゼミ形式の授業が多かったため、そうしたことを考える機会がとても多かったように思います。

最後になりましたが、多くのことを教えてくださった先生方、たくさん話し、共に勉強に励んできた専攻科の仲間、そして自分を支えてくれた家族、その他大勢の方々に深く感謝しながら、4月から教師としてがんばってまいります。本当にありがとうございました。

語り合う会が定期的に行われています。この例会で私は、技術的な面だけでは語れない、良い写真というものを判断できるようになったと思います。例会で得た反省点を次の例会に活かし…の繰り返しで、メンバー各々が展示に出せる作品を創り上げていきました。そして展示の日を迎え、80名超の写真群が会場に並んださまは、まさに圧巻でした。また会期中の会場は、例会であまり話せなかったり写真を見れなかったメンバーとの交流の場にもなり、自分の見識

を広める良い機会となりました。

この4年間、素晴らしい人々との出会いはもちろんですが、「写真」という、一生続けていこうと思えるものに出会えたことも非常に貴重なことだと思います。

合同写真展'08出展作品
雪の日の都留を撮りました

旅立つ言葉 大学院修了生から

都留・私・ことば

国文学専攻
鈴木彩子

国語教師になりたいという強い希望を持って、都留の地に移り住んだのが6年前。都留での生活のピリオドを間近に控えた今、大変感慨深いものがあります。特に大学院での2年間は実り多いものでありました。牛山恵先生のもとでもっと学びたいと院進学を決めたのは学部4年の秋。「生活主義教育思想と国語教育」のテーマの下で、戦前から戦後にかけての生活主義教育をめぐる理論や実践、論争を追ってきました。今年度は、国語教育史学会と全国大学国語教育学会で2度に渡り発表の機会を得ることができ、今後の研究課題も明らかになりました。東京で行われる研究会にも毎月足を運び、さまざまな校種の先生方の実践やご研究からいつも多くを学ばせていただきました。

また、県立高校で非常勤講師として、2年間に渡りたくさんの方の生徒と関わる事ができました。大学というアカデミックな場で研究を進める一方で、学校現場を経験し生徒たちとの関わりの中で授業を作り上げていくことは、苦しいながらも大きな喜びでした。

このような中で進める研究は、子どもとその生活に真摯に向き合い、実践を重ね、論争を繰り広げた先人の言葉か

ら教員を志す者として大きな励ましを得るものでした。主体的・能動的な生活の中から生まれる言葉、あるいは主体的・能動的な言葉から生まれる生活を求めることは、国語教育に留まらず、広く人間形成において重視されるべきものでしょう。

そんな「言葉」を尽しても伝えきれない想いもあります。牛山恵先生、田中実先生、西本勝美先生始めお世話になった先生方、大学院の仲間たち、国語教育学ゼミの後輩たち、いつも応援してくれる家族や友人、山梨県立桂高等学校の先生方と

生意気でかわいい生徒たち、本当にありがとうございました。私が4月からよりよい実践を目指していくことでみなさんへの恩返しとなるでしょうか。みなさんの今後のご活躍とご健康、そして都留文科大の躍進を願ってやみません。



学部時代を共に過ごした友人が約2年ぶりに都留に集合

「旅立ち」の役割

英語英米文学専攻
佐藤健司

「旅立ち」という言葉は「希望」と「別れ」の語感を併せ持つ。まさに、「始まり」と「終わり」を感じさせるものだ。それらを接続する「旅立ち」は過去を振り返り総括し、将来を展望するために与えられた、長い人生の中においては、ほんの一瞬の儀式である。その刹那的な旅立ちの時に我々は新たなステップを一段上る。そんな日を今日迎えようとしている。

「まだまだ勉強不足、やり残したことがある」と、一念発起して都留に舞い戻ってきたのは卒業して3年が経った2008年の春のことだった。

都留への愛着と、担当の先生方の溢れる魅力が私を都留へとattractしたのだろう。研究を始めることへの期待と同時に、歳が離れた私を周囲に受け入れてもらえるのかという大きな不安があったが、それは杞憂であった。

大学院での2年間は、研究はもちろん、学部の講義のアシスタントを務めるティーチングアシスタント(TA)等、実に充実したものであった。特にTAは非常に良い経験となった。担当の先生と交わした会話から様々なことを感じ、学んだように思う。人間同士の温もりのある生のコミュニケーションからは学ぶことが実に多い。院生をはじめ、先生方や学部生の多岐にわたる話題は、知的興味を刺激する

旅立つ言葉 大学院修了生から

修士論文に寄せて

比較文化専攻
島津創太

この都留で過ごした6年間は独特の空気感に包まれたものだった。上手く言葉にはできないが、自分にとってはいい環境だったのだと思う。

私は最初の4年間で国文学科、後の2年間で比較文化専攻で過ごした。先生方に御迷惑をかけつつも自由奔放に研究させていただいたと思う。卒業論文では吉本ばななの作品について、修士論文ではテレビゲームと〈身体〉の関わりについて論じた。この極端

ものであった。

振り返ってみれば、様々な経験をし、実に多くの出会いがあり、そこから多くのことを感じ、学んだ。特に人間同士のつながりの大切さは改めて認識した。それら全ては目に見えないものであるが、私の心の中にしっかりと財産として残っている。人間性、人間関係を探る都留「文科」大学の大学院で学んだ2年間の証である。この身につけた財産は、将来にわたって人生の至る所で役立つに違いない。この財産は我々の暮らしを豊かにするものであるからだ。「個」に向かいがちな現代においては、この財

とも言える研究の転向については種々の理由があるのだが、中でも大学院のゼミで学んだ吉本隆明の共同幻想論の影響が大きい。娘から父への研究の移行は不思議な縁であった。この共同幻想論と現代のサブカルチャーの関係について、ゼミ内で取り組み形としたのが今回の修士論文だったのである。

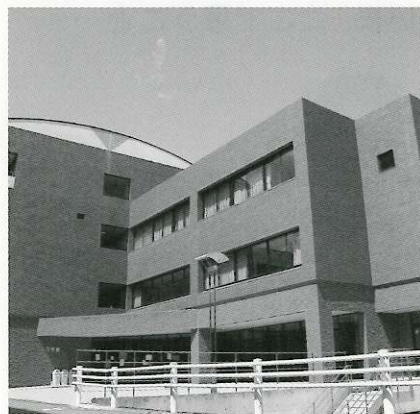
こうした題材を扱うことの意味を改めて考えてみる。あらゆる文化は人間の心性の反映であるが、サブカルチャーがこれからの時代に果たす役割として、その反映を具体的に抽出する可能性が挙げられる。すなわち、人間を人間たらしめているものを非科学的

産の価値は相対的に高まるであろう。

振り返ることで、得たものを再認識し、未来につなげる。これを今、私はこの旅立ちの時に行っている。「始まり」と「終わり」を仲介するインターフェイスとしての「旅立ち」の役割は、確実に我々を成長へと導いてくれるものであろう。



2月10日の口述試験を終えて 前列左より、河西玲子さん、小嶺亮之さん、本人。



な部分から浮き彫りにすることが可能なのではないかと思うのだ。現代は「人間らしさ」が曖昧になりつつある時代である。今後その可能性はさらに強まってくると思われる。そうした中で曖昧になりつつある自己をしっかりと保つための指標として、このような分析が意義を持つときが来るのではないかと感じるのである。

拙い論文ではあるが、なんとか形にできたのはゼミの友人二人の協力があってお陰である。この場を借りて謝意を表す。

こうした試みを大学院という場で実践できたことは非常に貴重な体験だったと感じている。今後どのような形でかは分からないが、この経験を活かしていければと思う。指導教授の鳥居先生をはじめ、諸先生方、大学の職員の方々に感謝の言葉を申し上げつつ、結びとしたい。

旅立つ言葉 大学院修了生から

いま、ここで思うこと…



社会学地域社会研究専攻
宮崎友靖

私は、この街で一体いくつの呼び名をつけられたのだろうか。

もともと私の名前は二文字で区切れれば、あだ名になってしまうため、都留に来るまでにもはや数えきれないあだ名をもってはいたが…。道行く市民の方や子どもから「じげん」「みやとも」と呼ばれ、その都度周りにいた学生に「お前のこと？」というような視線を浴びせられ…。はたまた「ミヤ君」「骨折の子」「デジカメ伝道師」「ニシザキ」「宮崎先生」と一体いくつのあだ名(?)をもっているのか、もはや本人ですら定かではない。

ただ、一つだけ言えること。それは、そうして呼んでもらえるほど自分がこの街に溶け

込めたという事実である。はじめ都留に来た当初は20数件しかなかった携帯の電話帳は、この7年目にして300件を超えるに至った。その中には家族や良き友人たちを筆頭に、市民の方や仕事先の方、現職の教員、留学生…と本当に様々な分野の人々に囲まれて私はここまで来た。実家の母などは、私の入学当初、毎晩心配で泣いていたらしいが、心配される当事者は良き理解者に囲まれて笑顔の絶えない毎日だった。

また、それ以上に意義深いことは、教職課程の必修という理由で履修した日本国憲法が私の心をつかんで離さないものとなったことである。帰省の際、スカイメイトを利用する都合で、新宿から羽田までバスを利用していたが、いつも道脇にビニールシートや段ボールで覆われた一角を目にすると、ため息が止まらなかった。はじめは「教職の必修だから」という理由で出席

していたが、逐次渡される分厚い資料を読み返すたびに、自分の中に悶々としている想いや物事が、憲法の理念に照らして矛盾していることに気づかされ、心惹かれてしまったのである。

そんな刺激に満ち溢れた講義の担当教官であり、今日まで指導教官でもあった横田力先生には7年間という長い間、公私にわたりお世話になりました。途中、苦悩の日々にも優しく手を差し伸べて下さいました。本当にありがとうございました。大学改革という大きな時代のうねりの中にあって、常に学生と教職員、そこで営まれる大学教育の理念を第一に考え、行動され、そんな先生を私もささやかながらお手伝いできたこと本当に嬉しく思っております。

いま、私が思うこと。それは人が人によって育てられることの意義。大学院生になって有志での勉強会の企画、学会や他大学の勉強会、市民の活動に参加することで、常に新しい地平が開けた（気がしている）。機械的な教育ではなく、個々のオリジナリティ、問題関心や様態を尊重した教育が持つ意義。

それを考えることは、学生のみならず、今後の大学の展望を考えることにもつながる。

人間愛、友愛に満ち溢れた大学生活に感謝しながらも、「今後もそんな大学であってほしい。」

今、ここにそう思い至った。



7年間通い続けた2号館入り口

旅立つ言葉 大学院修了生から

謝



臨床教育実践学専攻
吉江昭子

2年前、今まで一緒に過ごしてきた仲間が都留を去り、私は送り出す側として去っていく皆を見送りました。皆が去った後の都留は、何とも言えぬ寂しさが漂い、一人取り残されてしまったような、そんな感覚を覚えました。でもそう言っているのも束の間で、大学院生としての新生活がスタートし、そんなしんみりとした気分には慕っている余裕はなくなっていました。

大学院生活は、一言で言うなら自分自身との戦い。手を抜こうと思えば手を抜けるし、必死にやろうと思えばいくらでもやれる、まさに自分自身との真剣勝負の日々でした。特に、修士2年の時は修士論文の作成と中学校でのTAを並行していたので、時間的にも精神的にも大分追い詰められたときもありました。院生室に行くのが嫌で足が遠のくこともありました。



臨床教育実践学専攻修了生のメンバーと・・・
(左より、本人、塚原成幸さん、嶋田裕子さん)

孤独との戦い…それが一番つらかったように思います。やるも自分、やらぬも自分。泣くも自分、笑うも自分。日々はこの繰り返しなのですが、一番落ちていた時に救ってくれたのは、やはり研究室の先生方・先輩方であり、大学院の同期の仲間でありました。この方々の期待や信頼を裏切ってはいけないという一心でやってきたように思います。やれば自ずと次の課題が見えてくる。これはなかなか修論が進まなかった私にある先輩が言ってくれた一言ですが、今は本当にそうだと思います。何か一つのことを成し遂げるといことは、自

信と次へのステップにつながるのだと思います。

そして、研究と実践を通して見えてきたことがあります。「いい集団で過ごした経験のある人は、人を救う」ということです。自分も他人も救えるのではないかと、そんな気がしています。これはワングルの4年間、河村茂雄先生の基で学んだ日々の中で感じたことです。都留で関わったすべての方々に感謝の気持ちでいっぱいです。ここで培ったことを糧として今後の人生に活かしていきたいと思っています。本当にありがとうございました。

平成21年度 卒業者・修了者予定数

■文学部

初等教育学科	196名
国文学科	92名
英文学科	110名
社会学科	131名
比較文化学科	108名

■専攻科 文学専攻科

教育学専攻	8名
-------	----

■大学院 文学研究科

国文学専攻	2名
英語英米文学専攻	3名
社会学地域社会研究専攻	1名
比較文化専攻	6名
臨床教育実践学専攻	3名





卒業論文・研究論文・修士論文一覧

学部卒業生、文学専攻科、大学院研究科修士生の卒業論文、研究論文、修士論文の全タイトルを掲載する。今回掲載したのは、今年度に提出された卒業論文等であり（前期卒業・修了も含む）、実際の卒業生・修了者とは異なる場合がある。

初等教育学科

麻場一徳ゼミ

的場弘晃 都留文科大学生の跳び箱運動の習得状況についての分析研究 —第二局面に着目して—

佐藤里奈 ロングキックのキックフォームと飛距離に関する研究

小澤洋子 競技スポーツの継続にかかわる研究 —始めたきっかけ、やめた理由と競技成績との相互関係—

三森美里 小学校体育におけるバドミントン導入に関する研究

長倉由佳 4×100mリレーのバトンパスについての研究

保坂美礼 女子棒高跳競技者の運動能力・運動歴に関する研究

島田和佳 棒高跳の初心者指導に関する実践的研究 —大学生の初心者を対象として—

杉山結衣 女子三段跳における助走が跳躍距離に及ぼす影響 —女子学生競技者を対象として—

高橋和也 スポーツ少年団の現状と課題 —富山県の卓球スポーツ少年団について—

上田千曉 女子400mハードル走のレースパターンとパフォーマンスの関係 —大学女子選手C・Uの場合—

水谷友紀 陸上競技女子優秀選手における20年間の記録の変化について

青柳梨佳子 石和町小学校における運動会について

前田雅美 子どものための陸上運動プログラムに関する研究 —その3 運動プログラムと運動能力向上の関連性について—

大久保南美 小学校体育における水遊びに関する研究

五十嵐裕紀 体力向上に資する食育の実態と食の指導体制 —内容への反映について—

池田充裕ゼミ

遠藤高英 『競争』と『学び合い』の教育 —イギリス・フィンランド・犬山の教育を考える—

鈴木恵子 深化する教育格差 —教育格差が広がる日本と格差是正でみるフィンランドの教育—

高橋康加 日本の公立中学校における外国人教育 —日本語教育を中心として—

宮本桃衣 初等教育におけるキャリア教育のあり方と可能性

植村憲治ゼミ

浦井政高 日本とアジア諸国との算数比較 —英語で算数を教えるには—

川田和美 我が国の算数教科書比較研究 —指導法の検証と考察—

神田昌臣 グラフ理論における諸定理の考察 —全域木の構造研究—

佐藤真理子 特別支援教育を視野に入れた通常学級の算数教育

野尻詩織 全国学力・学習調査にみる日本の算数教育 —出題の変化と問題点—

春日作太郎ゼミ

阿部実央 大学生の対人関係への洞察に及ぼすピアカウンセリング・グループの効果の検討

長田晴香 大学生女子の対人不安の変容に及ぼす親子関係をテーマとした小集団活動の効果の検討

窪田 健 「周囲の人の顔色を読んでばかりいて苦しい」と訴える大学生男子の人生却本への気づきに及ぼす交流分析を導入した半構成的エンカウンター・グループの効果 —事例研究—

白石莉菜 大学生女子の不合理的自己概念への気づきと変容に及ぼす空椅子技法を用いたセルフヘルプ・グループの効果の検討 —事例研究—

森田成美 大学生の恋人関係と幼少期親子関係への洞察におけるフォーカシング・アビリティとスタッフの自己一致の関連性の検討 —ピアカウンセリング・プロセスの分析を通じて—

森田成美 大学生の恋人関係と幼少期親子関係への洞察におけるフォーカシング・アビリティとスタッフの自己一致の関連性の検討 —ピアカウンセリング・プロセスの分析を通じて—

森田成美 大学生の恋人関係と幼少期親子関係への洞察におけるフォーカシング・アビリティとスタッフの自己一致の関連性の検討 —ピアカウンセリング・プロセスの分析を通じて—

森田成美 大学生の恋人関係と幼少期親子関係への洞察におけるフォーカシング・アビリティとスタッフの自己一致の関連性の検討 —ピアカウンセリング・プロセスの分析を通じて—

鎌守信彦ゼミ

佐々木剛 全国ジュニア柔道選手における試合結果の分析 —福井県大会の試合結果と比較して—

後藤道夫ゼミ

根岸里美 母子世帯と就労

野口紗弥香 保育制度改革 —『新たな保育の仕組み』について—

橋本千萌 子どもの貧困と学校制度の現状と課題 —全国学校事務職員制度研究会の実践から—

山田浩嗣 公民館と子ども

吉新奈穂美 女性の派遣労働 —女性派遣の現状を知る—

小林重章ゼミ

丹澤大樹 体罰としつけ

寺岡明日子 自然体験活動の教育的意義

中村仁美 なぜ学校に行くのか

藤田 光 子どもたちをつなぐ仕事 —学級づくりと授業—

松尾太史 書くことの教育について

森 春香 子どもとケータイの関係について

坂田有紀子ゼミ

近藤美幸・居積真由美・山口紗絵子 都留市鹿留川におけるカワラナデシコの生活史と個体群構造

荒木友子・中林拓人・堀綾乃・堀江祐香 戸沢川におけるカジカの生息状況と湧水との関係 —カジカが戻ってくる川を目指してII—

卒業論文一覧・初等教育学科

佐藤 隆ゼミ

- 前迫潤哉 子どもが自ら発言したくなる授業
 竹井道子 へき地教育の可能性 一大島町の小学校
 統廃合から見えるもの—
 鳥井浩美 メディアと共に生きる —メディア・リ
 テラシー教育の必要性—
 陣野原真理 子どもたちのつながりを求めて —子
 どもが抱える困難から見えてくること—
 梶沼裕樹 学びある授業づくり
 正木李佳 学校プロブレム
 渡邊 俊 求められる障害者像とその社会
 朝日香織 小学校における外国語活動のこれから
 関ひな子 佐藤博先生の教師物語を追って
 谷本真有美 メディアから見える日本の家族観
 青木恵美 子どもに対する教師の関わり方

清水雅彦ゼミ

- 荒井 望 歌唱法 —歌声の基礎をつくるために—
 伊藤 碧 児童期における音楽療法 —障害児を対
 象として—
 中野静音 ミュージカルの魅力 —歴史から辿るミ
 ュージカル—
 早川菜々 ラフマニノフ —その功績と影響を受け
 た音楽家たち—
 藤原龍大 今を生きる音楽
 前原あゆみ イタリア歌曲の歴史と変遷
 松田奈弓 音楽活動からみた幼保小の連携について
 吉田亜由美 なぜ音楽の都と親しまれるのか —ウ
 ィーンの魅力—

梶守光恵ゼミ

- 岩間結香 表現の可能性 —児童期における音楽教
 育に焦点をあてて—
 是枝奈穂子 音楽による心理療法 —音楽が障害児
 に与える影響—
 佐藤龍哉 リズム表現の可能性 —体で感じる音楽
 科指導—
 佐藤英恵 教育のなかの音楽 —小学校音楽科授業
 における『音楽理論』指導の意義—
 清尾佳加 聴覚障害と音楽 —聴覚障害を持つ子ど
 もと音楽のかかわり—
 前田 祥 日本と音楽のつながり —音楽が人にも
 たたらすヒトへの作用—
 安政央恵 音楽の持つ力 —音楽が人間に与える
 様々な影響—
 若澤あゆみ 学童保育における音楽の取り入れ方
 —子どもたちが安心して語り合える環境づくり—

添田慶子ゼミ

- 井上貴裕 都留文科大学学生のスポーツに対する意
 識に関する研究 —好意度と得意度の関係から—
 小下政孝・鈴木亜弥 大学生と小学生における健康
 意識と健康レベルに関する研究

高田理孝ゼミ

- 花木俊平 色に対するステレオタイプの認知と色嗜
 好傾向との関係

賀数さゆり ワーキングメモリの中央実行系に関す
 る一考察

阿部和佳子 メタ記憶 —既知感 (FOK) の評定
 と再認の正答数との関係—

金山大地 事後情報効果による記憶の変容

勝又梨奈 写真による第一印象 —表情と性格特性
 の認知—

原 悠太 条件推理能力の発達に関する研究

亀田由記 計算課題の遂行に及ぼすBGMの影響に
 ついて

井上裕介 英語読解におけるスキーマの役割

金城 生 自己開示と自我同一性について

竹下勝雄ゼミ

松井希望 美術館教育におけるスクールプログラ
 ムの現状と可能性

山田彩可 色彩がもたらす感覚と、その役割につ
 いての一考察

山城理乃 図画工作科における平和学習の展開に
 関する研究と実践

西本幸子 人と美術をつなぐトリックアートの魅力

船本美緒 アートプロジェクトにみるまちづくりの
 試み —石川県金沢市の取り組みから—

宇都宮香奈 美術教育におけるクロッキー学習の役
 割と可能性 —鹿児島県の実践例をもとに—

田中孝彦ゼミ

大窪かおり 子どもの遊びを見つめて —自己の育
 ちの角度から—

笠井可奈子 トリイ・ヘイデンを読む —虐待され
 た子どもの成長を見守る教師の姿とは—

桐原早紀 いじめる子・いじめられる子、両方を守
 る教育とは —教育実践者の語りから『攻撃性』に
 ついて考える—

武田みどり 子ども理解と学習の質の変革 —丹羽
 実践と臨床教育学から『自己の生き方を問う学び』
 を考える—

中田久美子 思春期の子どもにとっての学校・教師

村上祐人 人の持つ原風景 —大学生への聴きとり
 から—

谷田川美帆 地域に生きる教師たち —人とのつな
 がりを大切に子どもの成長発達を支える—

筒井潤子ゼミ

池端恵香 音楽が人の心にもたらすもの —教育に
 生かす音楽—

乾 智仁 よりよく生きるということ —生と死か
 ら学ぶ—

川野 愛 スクールソーシャルワークの視点から見
 る子ども援助

狩野 慶 共感的自尊心を持つということ —一人
 旅・地域交流研究Ⅳをヒントに—

高須翔太 家族“愛”を考える —私から見た家族、
 家族から見た私—

津ヶ谷沙希 教師という援助職における“共依存”
 —ともに成長する—

土屋 愛 虐待を受けた子どもの甘えについて

卒業論文一覧・初等教育学科

堤千絵子 青年期の生きづらさ ―大人になるということ―

寺尾美由紀 女の子における集団所属性 ―心の居場所を求めて―

村松恵理子 人目を気にする ―思春期を生きるしんどさ―

鶴田清司ゼミ

五十嵐小夜・守屋洋佑 子どもと読書 ―これからの読書教育―

片桐康裕 見たこと作文指導法の研究

高野圭祐 国語科におけるノート指導について

高野 剛 国語教育における暗唱の可能性

林 順子 童謡教育で読む力をつける

堀部久美子 『論理的思考力』はどのようにして育てるか

矢後むつみ 文学作品の授業と評価 ―パフォーマンス单元を生かした授業づくり―

鳥原正敏ゼミ

川崎公平 図画工作における指導内容について ―写真を用いた表現活動の可能性―

吉田詩文 図工・美術教育の可能性 ―特別支援教育における一考察―

前沢若奈 図画工作指導についての考察 ―制作過程における評価の可能性―

佐々木有希 「つくりだす喜び」についての一考察 ―造形表現を通して―

阿部汐里 図画工作指導についての一考察 ―子どもに夢や希望を抱かせるために―

中井 均ゼミ

佐藤由希・溝口 結・山口大輔 都留の大地観察マップ製作とその教材利用

當房牧人・水野貴佳美・渡邊啓子 沖縄県宮古島の海岸砂の研究 ―その2―

西本勝美ゼミ

小西直子 顔の見える関係が地域をつなぐ ―協働する行政と住民―

後藤真理奈 子ども同士の関係を築く ―生活と想いを共有し、安心できるクラスを目指して―

佐々木望美 自分とであい 世界をひらく ―読書で育む力・読書で繋がる人―

辻村洋志 学校と地域がつながり子どもを育てる ―地域での学びを活性化する―

永山敬直 子どもが主役になれるスポーツ環境 ―家庭・地域・学校の役割・連携―

前田佳南 見つけ合う・認め合う学校生活 ―小学校学級集団づくりを通して―

松尾 英 見る目を育てる社会科 ―現実をつかむ地域学習―

箕輪和章 いのちと向き合う教育 ―いのちに触れる生活の体験を通して―

宮澤健太郎 世界を見つめる視野を育む教育とは ―開発教育の観点から―

箱石泰和ゼミ

河井志乃 子どもをつなぐ授業 ―斎藤喜博に学ぶ―

小島奈菜 今、子どもたちに必要な基礎学力とはどういうものか ―蔭山メソッドを検証する―

丹野佑希 『小学校英語活動』のあり方を考える ―活動の提案―

二瓶仁美 『生きる力』育む学校図書館 ―戦前・戦後の日本、諸外国の実践に学ぶ―

寺川宏之・長谷川武博ゼミ

熱海佑一郎 わり算って何だろう？

伊関麻里 わかる！できる！楽しい！算数の授業

小田和 恵 算数的活動を支える身近な教材

一身の回りにある物で授業を面白く楽しくする―

神田晴奈 The History of Numbers (数字の歴史)

城戸栄美佳 特別支援教育における算数指導

久内美幸 美と黄金比の関係

鈴木 彩 つまづき0！！ ―わかる算数教育―

奈良智樹 乗法の歴史的変遷とその指導法

宮坂恵美 ほって、探って、ゼロの秘密

藤本 恵ゼミ

市川理絵 勾玉三部作研究 ―少女の物語

貝原俊輔 『化物語』論 ―西尾維新による小説維新の検証―

熊瀧 優 本を読めない、読まない子どもへの読書指導

佐藤安希 小野不由美『十二国記』論

清水浩美 柏葉幸子ファンタジー研究 ―より良い表現力を身に付けるために―

関谷風子 工藤直子の童話研究

西村知穂 『ウィキッド』論

三輪彩乃 長野まゆみの初期作品研究

森 博俊ゼミ

堀江恒祐 ある「障害」の経験 ―青年の語りを通して―

水上絵理奈 「できないこと・わからないこと」に直面した子どもの情動とその理解 ―中・高校生への聴き取り調査を手がかりにして―

佐藤 薫 聾者にとっての手話との出会いとその意味 ―当事者への聴き取りを通して―

松永佐和子 他者とかわる思春期の困難と支援 ―不安の時代のゆるる心―

柳 宏ゼミ

小林美和 バレーボールセッターのゲームパフォーマンスが勝敗に及ぼす影響 ―関東女子三部リーグの場合―

伊東 節 運動遊びやスポーツ経験が遠投動作に及ぼす影響について ―本学男子学生の場合―

濱 美季 小学校体育におけるコーディネーション能力を高めるための授業づくり研究

網野桃子・赤坂清香 バレーボールのスパイク動作の分析研究 ―オープンスパイクとクイックスパイクを比較して―

小山 剛 バスケットボール・3ポイントシュート

卒業論文一覧・初等教育学科

の動作分析

丹澤恵太 小学生の運動生活に関する一考察

高島 健 TOTOに関する意識調査及びスポーツ振興の現状とその後

小沢安司 スポーツ経営からみた総合型地域スポーツクラブの現状と課題

郡山 香 鉄棒運動『前方支持回転』の学習過程における動作分析と指導が被験者に及ぼす影響

山本安夫ゼミ

佐久間理志 温度変化による金属抵抗と自由電子の関係

長森亮太 金属抵抗と自由電子

藤巻美香 様々な電池の内部抵抗と効率良い回路の検証

横内宏美 様々な電池の内部抵抗と効率的な回路の実験と考察

向山真以 電池の内部抵抗と効率的な回路に関する研究

山本郁美 様々な電池の内部抵抗とその効果的な回路の実験と考察

山森美穂ゼミ

伊藤オリブ・志村拓矢・與畑幸徳 理科に興味を持

たせる機会づくり ―親子科学教室の実践と実験を取り入れた授業の検討―

京地加奈子 小学生を対象として地球温暖化の科学的側面をわかりやすく伝える方法の考察

小寺真実子・齋藤大地・齋藤悠人 多地点観測データによる都留市近郊の光化学オキシダント流入経路の解析

吉住典子ゼミ

小倉詩織 被服機構学 ―被服圧とカロリー消費

中込真奈美 言葉かけについて ―ストレスとエネルギー1―

荒時貴峰 食育について ―地産地消と食育1―

長谷川訓子 言葉かけについて ―ストレスとエネルギー2―

松本加奈 食育について ―地産地消と食育2―

三宅智久 食育について ―塩分と血圧の相互作用―

武藤良幸 『快眠』とは



卒業論文一覧・国文学科

国文学科

上代文学 鈴木武晴ゼミ

齋藤真生 枕詞「ぬばたまの」考

高橋 愛 万葉集の植物歌 ―梅と桜―

田中杏奈 ヤマトタケル伝説

塚越めぐみ 黒駒のうた

土屋佐季 上代人の言葉と心

中澤真由美 湯原王の和歌

萩原絵里 『万葉集』の紅と椀

福嶋綾子 万葉集の橘

益子大毅 スサノヲノミコトの異相

舟田真樹 神々の真実

水嶋純子 創造起源論

中古文学 加藤静子ゼミ

荒永詩織 『落窪物語』と『住吉物語』 ―継子いじめ物語としての差異―

小野亜希子 『狭衣物語』における風景 ―古活字本系統を中心に―

坂 文代 『狭衣物語』の表現世界 ―語彙的観点から―

由井雅人 母親像から見る『狭衣物語』

中世文学 佐藤明浩ゼミ

浅川 舞 付喪神について ―室町物語『付喪神記』を中心とした考察―

上野ひとみ 建保名所百首考 ―万葉集・八代集との比較を中心に―

内田小雪 『とりかへばや物語』における性と恋愛

大谷香織 狐考 ―『玉藻前』を中心として―

倉沢 希 「うつろふ菊」の表現について ―和歌を中心に―

小林未央 中世文学における小野小町像

金香菜子 宇治拾遺物語について ―説話配列から全体像を見出す―

竹ノ内理恵 『浦島太郎』考 ―その時代性から―

矢口涼子 善阿をめぐる連歌の流れといその享受

近世文学 楠元六男ゼミ

伊澤圭祐 水子考 ―流される嬰兒たち―

大塚美樹 「心中大鑑」から「唐崎八景屏風」へ ―巷説と脚本―

大堀綾子 『続の原』について

角田那々江 近世前期における女性の服飾文化

杉山由貴乃 四方四季考

中村彰子 盛岡祭考 ―盛岡舟っこ流し―

山田諒子 『北越雪譜』の「縮」について

久保田真理 「異界」論 ―御伽草子『浦島太郎』、『梵天国』から―

近代文学 阿毛久芳ゼミ

今井佑花 『瓶詰地獄』論

大山知子 原爆文学としての「父と暮せば」

上村好恵 小川洋子『偶然の祝福』論

栗原佐和子 中原中也論 ―女性と雪―

弦間久美 伊坂幸太郎、作品とその世界 ―メディアの観点において―

卒業論文一覧・国文学科

小杉一徳 石川啄木論『一握の砂』『悲しき玩具』の魅力
 坂本麻美 道化と仮面 ―太宰治と三島由紀夫 その文学について―
 藤芳 愛 山本文緒『プラナリア』論
 溝口あずさ 藤村詩集にみられる恋の暗
 宮坂佳那 谷川俊太郎『minimal』論
 柳野樹梨 国木田独步『春の鳥』論
 山田友美 尾形亀之助『色ガラスの街』論
 山本奈津子 梶井基次郎論 ―「櫻の樹の下には」を中心に―

近代文学 新保祐司ゼミ

内田元気 久野豊彦の文体について
 大須賀 聖 三島由紀夫と死と美学
 尾崎友希絵 小林多喜二『蟹工船』は現代に通用するのか
 加藤千明 谷崎潤一郎『春琴抄』論
 橋本彩貴 「ごんぎつね」の教材的価値について
 南 舞香 坂口安吾論
 盛永達也 中島敦論 ―「南洋行」のもたらしたものの―
 渡邊 亮 『陰翳禮讃』『細雪』に見る谷崎潤一郎の日本
 金澤 陽 笑論
 宮本麻央 プロテクトデザインの中の日本 柳宗悦論

近代文学 田中 実ゼミ

岩澤公平 『名人伝』における「相対」と「絶対」について
 大楠弥央 安岡章太郎『陰気な愉しみ』論 一期待と不安の関係に宿る真の欲望―
 岡田祐輔 大江健三郎「鳩」より
 長田典之 萩原朔太郎『猫町』論
 加藤愛美 村上春樹『ノルウェイの森』論
 河野美佐子 条理をつらぬきながら、人間は世間を生きていけるのか。人間、大庭葉蔵とは、何を考え、生きていたのかを考察する。
 鈴木舞子 夏目漱石『こころ』論 一読み継がれる意味を探る
 根岸智史 田山花袋『蒲団』論
 橋本 俊 夏目漱石「門」論
 三井千佳 『ガラスの靴』論
 平野 智 『道化の華』論 一語りの方と文脈の生成―

近代文学 古川裕佳ゼミ

荒井瑠美 三浦綾子『塩狩峠』論「感動の文学 塩狩峠の仕組み」
 石元みさと 森絵都『DIVE!!』の魅力
 市川陽子 川端康成「古都」論
 小平かがり 倉橋由美子『聖少女』論
 佐野亜沙来 坂口安吾論 客体として描かれる女性
 土屋亜沙美 「片腕」論
 樋口寛晃 江戸川乱歩「人間椅子」論
 百瀬まな美 川端康成「たんぽぽ」論 一欠けているものの視線 逆説的な創作としての欠視

工藤裕貴 谷崎潤一郎『柳湯の事件』論

国語学古代語 高橋宏幸ゼミ

岡崎郁美 活用形の機能の変遷 ―打消助動詞「ず」―
 岡田友美 泣涕表現に関する考察
 前田幸子 接続語「さ」の用法と意味について

国語学近代語 樋渡 登ゼミ

飯田亜希子 横溝正史作品に見られる二重否定の当為表現
 大野貴史 「最高」の意味と用法について
 神宮司沙希 五代目古今亭志ん生落語における江戸語的表現について
 沼田朋広 岩手県方言における挨拶表現について
 平賀理恵 『新約聖書馬太傳』における漢字語彙の振り仮名について
 藤川麻理子 「夕やけ小やけの赤とんぼ」の解釈について
 若尾 圭 山梨県南部地域方言語彙に見られる世代差について

漢文学 寺門日出男・野村邦近ゼミ

今井美咲 太宰春臺『論語古訓』について
 小松麻衣子 『世説新語』の人物観
 水野つかさ 歐陽脩の擬古文について

国語教育学 牛山 恵・安達雅夫ゼミ

天野賢介 大村はまの国語教育実践について
 井川 唯 セルフ・エスティームと国語教育
 坂口花苗 絵本が育む生きていく力 ―佐野洋子『100万回生きたねこ』を中心に―
 佐藤誠二 戦後教育における道徳との関連 ―学習指導要領を中心に―
 高橋理恵 児童文学に描かれる家族 ―これまでとは違う家族のあり方―
 高村康大 「死への準備教育」のすすめ ―中学校国語科へのアプローチ―
 中島幸香 読書感想文における書かれ方の変化 ―戦争作品を中心として―
 中田翔子 金子みすゞ研究
 藤尾真奈 「いじめ」を扱う児童書の傾向と課題
 増田あづさ 絵本にみられる自己犠牲とそのあり方
 松本理愛 入門期の国語教育
 山本美沙 教科書教材と子どもの人権



卒業論文一覧・英文学科

英文学科

富樫 剛ゼミ

- 合川奈菜 シェイクスピアと花
 伊東幹貴 Monsters —利用される怪物
 小笠原早織 イギリス・ルネサンス音楽
 小林文香 シェイクスピア喜劇の集大成としての『十二夜』
 滝川久美子 魔女論 —初期近代イギリスにおける魔女と呼ばれた者たちの実体
 竹内ひかり 『オセロー』の中に見るアイデンティティと結婚
 反中綾香 『オセロー』の愛と嫉妬
 土屋匡永 *Astrophil and Stella*にみるサー・フィリップ・シドニーの人生と作品の関連性
 松崎優美 ジョン・ダンの恋愛詩と宗教詩
 宮澤菜月 イギリスの民話と童話
 渡邊ゆか 初期近代イギリスにおける魔女裁判とジェンダー

大平栄子ゼミ

- 北川里実 *The Representation of Saudi Women in Girls of Riyadh: Their Dignity, Auguish and Fortitude*
 芦崎恵利佳 第三の性 —インド社会を生きるヒジューラを見つめて
 荒木千晴 ファンタジー作品からみる現代の魔女像
 石原果奈 インドにおける祭礼としての結婚式とダウリの慣習
 岩見結花 アンバーダガルの不可触民解放運動における不可触民への社会的影響
 大友由貴 Vikas Swarup —Q&Aにみるインド社会
 岡ゆりえ ディズニー映画が取り入れた悲劇
 大坊佳織 妖精の世界
 洞口知里 *Bend It Like Beckham*に見るインドの女性像
 松尾美紗子 *The Turbulent Decad*にみる難民支援 —ジェンダーの視点と可能性
 道廣祐貴子 20世紀初頭のイギリス児童文学における子ども観 —ピーター・パンの考察から

窪田憲子ゼミ

- 飯室恭介 ロックバンド OASIS研究
 梶 翔子 エリザベス・ギャスケル『メアリ・バートン』研究
 菊池由加奈 Frances Hodgson Burnett, *The Secret Garden*研究 —自然の再生に喚起された人間の再生
 小林万莉 ルイス・キャロル『不思議の国のアリス』研究
 藤本祥邦 Bob Marley, "ZIMBABWE" 研究
 八嶋美奈 Jonathan Swift, *Gulliver's Travels* 研究
 和家麻祐子 エミリー・ブロンテ『嵐が丘』研究

竹島達也ゼミ

- 河合浩昭 F.Scott.Fitzgerald —栄光と失墜20世

紀アメリカ

- 栗下 愛 ニール・サイモンの結婚観について
 小森翔太 ニール・サイモンの現在も色褪せることの無い笑いについて
 武尾 暁 テネシー・ウィリアムズ作品における自伝的要素
 徳留啓将 B.B.三部作に見られる Eugene Morris Jeromeのイニシエーション
 原口待子 トニ・モリスンの作品における黒人女性像
 宮田麻里奈 共有されるディアスポラ Caliban, Eliza, Mendel 3つの人間像
 山本茂樹 *Ma Rainey's Black Bottom* のアメリカ黒人に見る光と影

儀部直樹ゼミ

- 上杉祐一 『アンクル・トムの小屋』 —奴隷制度がもたらしたアメリカ北部・南部・奴隷の宗教観—
 大谷仁美 黒人霊歌に込められた奴隷たちの想い
 大塚未希 *Uncle Tom's Cabin* に込められたメッセージ —奴隷制を乗り越えるためのキリスト教
 落合 俊 映像作品から見るRoots
 二又省吾 『ちびくろサンボ』が生んだ論争
 依田亜弓 奴隷制度が生んだ音楽 —愛と平和の音楽 レゲエ—
 宮越健太 黒人映画 アメリカの映像作品からみる黒人の歴史

稲垣孝博ゼミ

- 上原愛理 PotterとMilne —ヴィクトリア朝とエドワード朝の子ども観
 鈴木春香 *The Lord of the Rings* —Middle-earthにおける原罪と墮落
 高松美桜 グリム童話の動物、その起源を追って —民間伝承と動物寓話
 戸倉建太郎 *Nineteen Eighty-Four*における全体主義国家 Oceaniaを構成する世界観についての考察

鷲 直仁ゼミ

- 板橋里佳 『サロメ』における女性の多面性について
 内山朋美 ジェイン・オースティンの恋愛観と摂政時代
 戎谷さおり シェイクスピアと女性
 大竹斐子 時代による結婚観の変遷
 小倉加那江 18世紀イギリス社交都市バース —君主と呼ばれた男 リチャード・ナッシュのつくる社交都市文化
 小澤 緑 イギリス文学・文化と日本文学・文化から考える、人が恋におちる瞬間
 中島彩子 『指輪物語』 —J.R.R.トールキンが描いたもの
 藤澤 有 小説や映画から見る占い師・魔女・悪魔
 水野遥香 『十二夜』の考察
 和田 歩 18, 19世紀イギリス女性の結婚観と現代の日本の女性の結婚観

卒業論文一覧・英文学科

三石庸子ゼミ

- 木原悠子 フェミニズム的視点から読む聖書
 小林志津乃 Construction of Progressive Black Masculinities : Liberation of the Entire People from Structural and Multiple Oppression in the United States
 大畑翔子 ウーマニズム研究 —アリス・ウォーカーが描く黒人女性の強さ—
 小田切夏樹 *Light in August* —Joe Christmasにみる神話的アレゴリーとキリスト像—
 弦巻思織 *The L Word* にみる現代アメリカ社会—セクシャル・マイノリティ—
 友田泰朝 『武士道』(*Bushido : The Soul of Japan*)の研究
 長澤秀美 *The Color Purple* 研究 —自由の先にあるものとは—
 平林祐樹 第22代アメリカ合衆国大統領、バラク・H・オバマ大統領就任演説研究 —オバマ大統領のスピーチ力と観衆を惹きつける言いまわし—
 前田ひびき アメリカ合衆国における移民排斥の歴史
 翠川恵里奈 キンケイド研究
 山口歩美 *A Mercy* 研究
 湯村美佳 資本主義社会が生み出した現代の奴隷について

大野真機ゼミ

- 佐伯友美 WhetherとIfの取り扱いに関する考察 —Stuurman(1991)とNakajima(1996)を比較して—
 宇田寛之 英語の早期教育は有効か
 加藤雄一郎 wh移動研究 —Phaseの観点から捉えなおす—
 金子 萌 第二言語習得における優位性 —複数言語との比較を通して—
 近藤孝啓 外来語の日本語表記について
 福永絵梨 The Relation between Morphology and Syntactic Operation

福島佐江子ゼミ

- 川口 優 Pragmatic Transfer in Second Language Acquisition
 慶寺千絵 ほのめかし表現に関する一考察：その要因と利点
 清水理紗 The Importance of Pragmatic Competence in English Education
 鈴木麻理子 「察し」に関する一考察：聞き手の役割
 高梨七恵 若者言葉におけるポライトネス・ストラテジー
 萩原亜耶 感謝表現に関する一考察
 檜山樹理 間接発言行為とポライトネス
 棟方史子 ポライトネス理論からみる若者ことば
 村松友恵 日本人英語学習者の語用論的能力に関する一考察
 大澤寛人 アイロニーの語用論的解釈

西出公之ゼミ

- 相澤聖子 The Effect of Shadowing

- 石井 暁 NGO・NPOのウェブサイトについて
 小川優美 デイズニー映画に見られる語彙の特徴 —中学校英語語彙との比較—
 斎藤裕樹 高校オーラルコミュニケーション教科書の語彙調査
 松村伸一 コミュニケーションの手段としての英語 —小学校英語の是非を中心に—
 山本恵美 英和辞典からみる類語の語意差異
 渡辺 惇 Winesburg, Ohioの語彙とスタイル

Anni Marlowゼミ

- 窪田拓朗 Impact of Pre-junior High School Exposure to English on Communicative Ability
 山本美里 The Role of Collaborative Learning in SLA —with a Focus on Lexical Knowledge—
 青木一哲 Japanese University Students Reading Speed and Implications for Classroom Teaching
 小熊冬美 Effect of Approach to Reading on Text Comprehension
 佐藤美咲 A Comparative Study of Vocabulary in First Year Junior High School Textbooks Used in Japan and Korea
 古屋 希 Effect of Peer Interaction on L2 Learning
 三浦 薫 Relationship between Collocation Knowledge and English Proficiency Level
 阿久津千聖 Effect of Extended Pausing on Listening Comprehension

濱谷ピアソンエロイスゼミ

- 手代木優 A Study of Teaching Strategies in the English Classroom
 岡部英左子 Insurance Sales in Banks in Japan
 加藤亜有未 Connections in English Education between Elementary Schools and Junior High Schools
 河村なみ子 English Learning in Elementary School in Japan through Second Language Acquisition Focused on Children
 坂口智子 Elementary School English Activities
 百海義生 Team Teaching with Assistant Language Teachers
 中田祐也 What Japanese People Could Do to Improve Their English?
 渡辺 翔 The Practical Theory for Output
 橋口朋矢 Looking Back : The Purpose for English Education in Japan
 宮崎康太 Successful Human Relationships



卒業論文一覧・社会科学

社会科学

環境教育ゼミ（指導教員：高田 研）

- 稲葉紘子 桜と日本人の関わりの変遷 —岩手県盛岡市・石割桜を現代の事例として—
 久保田祥江 コンビニエンスストアから出される廃棄物処理システムの現状と課題
 栗嶋駿志 エンカウンスペース考 —人と動物の関係史から—
 小山雅法 全国小学校・中学校環境教育賞における事例の分析
 野瀬裕幸 コンパクトシティを通して持続可能な社会を考える
 原田朋子 清掃イベントにおける主催者側のミッションと参加者の意識について
 馬場 渉 大衆観光地におけるエコツーリズムのありかた —富士山北麓地域の事例から—
 藤井秀樹 桂川のゴミ問題 —先行事例から見えてくる課題—
 堀内さやか 循環型社会と家庭でのリサイクルについて
 森島正弥 菅野川流域の住民と河川との関わりの研究
 室井由希奈 栃木県の環境教育施設の評価
 山口茜祐美 行政・企業が実施する環境教育の実相について —愛知県下の事例から—

環境社会学ゼミ（指導教員：平林祐子）

- 長田笑子 廃食油回収・精製から見える地域循環の形 —菜の花プロジェクト・川崎石けんプラントの事例を通して—
 中澤佐久良 風力発電による騒音被害についての考察
 阿部麻耶 環境保全型農業の魅力とは —長野県上田市の果樹栽培を事例に—
 長嶋雄基 環境問題における中学生の意識調査 —静岡県富士市を事例に—
 吉本幸子 若者参加による地域づくりのプログラム —イギリス、グラウンドワーク・ブラックカントリーの事例から—
 佐々木豪 環境配慮型投資の普及可能性 —環境に配慮したお金の流れの拡大に向けて—
 星 恵理 「普通のまち」にとって景観保全は何を意味するのか —神奈川県真鶴町の取り組みの事例から—
 鈴木桂太 最終処分場の危機と容器包装リサイクル法の限界 —ドイツのDSD方式への転換—
 大関康介 滋賀県近江八幡市円山地区におけるヨシ群落の変遷と人間活動の関わり
 大森洋介 中山間地域における震災からの生活再建およびコミュニティの復興について
 平尾和樹 環境保全に向けた車社会の未来
 上岡洋子 渇水に負けない地域づくりを考える
 長友 舞 食品廃棄物循環システムへの企業の参入の効果

企業経営／労働とジェンダーゼミ（指導教員：江頭説子）

- 飯田裕哉 企業の社会貢献 —社会における企業の役割とその責任—
 小俣恵子 定年後におけるジェンダー観 —夫の家事分担から—

坂本典子 ワーク・ライフ・バランス社会の実現に向けて —企業におけるWLB実現の意義とWLB施策の導入—

- 鈴木陽子 先進企業の経営戦略 —ワークライフバランスの制度と取り組み—
 鷹取千鶴 パートタイム労働の地位向上と均等処遇を目指す働き方・意識を考える
 土屋仁志 非正規労働者の現状と将来 —彼らをワーキングプアから救うためには—
 皆上敦志 性別職域分離の現状と今後の課題
 米山紗由里 パートタイム労働から見る主婦の働き方 —女性を取り巻く環境—
 小川一貴 介護労働の現状と課題 —介護労働が敬遠される理由—
 澤木悠史 日本における派遣労働 —派遣法改正と雇用破壊—

憲法ゼミ（指導教員：横田 力）

- 雨宮舞子 新自由主義教育改革と教育基本法「改正」 —教育の自由から国家による統制へ—
 飯田亮太 日本の雇用問題に関する政策をめぐる諸問題
 池本みゆき 学校選択制 —憲法改正・教育基本法改正からみた問題点—
 甲斐寛齊 表現の自由法理における給付と規制 —パブリック・フォーラム論を手がかりとして—
 蔵ヶ崎里 現代社会と子どもの成長を取り巻く諸問題 —子どもの貧困と健全な成長について—
 齊藤拓実 現代民主主義社会における表現の自由の機能と役割 —表現行為による公共圏の確立を目指して—
 齊藤正也 司法制度改革と裁判員制度 —刑事司法をめぐる国民の意識と司法参加—
 齊藤 豊 公訴時効について —その変更・廃止と社会実態—
 柴 泰志 社会保障制度の課題と可能性 —構造改革・新自由主義改革に対するオルタナティブを求めて—
 中澤茂貴 新自由主義と日本 —憲法改正の必要性はあるのか—
 中村成弥 少年犯罪と少年法 —厳罰化の意義とそれをめぐる問題状況—
 野田奈津子 ジェンダーと家族・子どもの三者構成をめぐる問題状況 —ジェンダー論、憲法学から見たアプローチ—
 水上真司 児童買春・児童ポルノ禁止法と表現の自由 —法改正の課題と性表現の自由、そして児童の健全な発達成長権について—

現代史ゼミ（指導教員：菊池信輝）

- 加藤雅美 長野県史と松代大本営
 菊田 薫 明治憲法体制における君主権についての一考察 —戦前・戦中期における昭和天皇の政治的能動性について—
 桑木隆平 逃げ場所としての大衆音楽
 小林春香 古民家の様式美と見直される住環境
 近藤悠介 富士北麓地域における観光開発史の比較考察 —河口湖畔と山中湖畔を事例に—

卒業論文一覧・社会科学

富永沙織 権力による出版の規制と推薦
 中村綾乃 郵政民営化についての一考察
 二宮勇貴 離島の発展と課題 ―奄美大島の事例から―
 深澤勇太 近代の消防とその変遷 ―現代に受け継がれる消防―
 森本圭純 日本の性風俗 ―歌舞伎町と吉原の違い―
 山岸 充 「日本の経営」の中の格差社会 ―グローバル化に伴うその拡大と深化―
 山崎将展 現代日本の入職構造 ―90年代から09年における新卒の就職活動―
 渡部和也 維新期の日本に対する西洋の眼差し

日本経済論ゼミ（指導教員：村上研一）

青井研吾 水道事業から水の商品化を考える
 黒澤 英 税制に関する考察
 小西達夫 アパレル業界の現状と課題 ―ユニクロのCSRとフェアトレードの可能性―
 中殿秀見 地方農村における寺院と地域社会との関係 ―長野県旧三水村を事例として―
 山崎拓也 年金制度の再構築について ―社会保険方式と全額税方式―

社会哲学ゼミ（指導教員：平野英一）

井上敦雄 ショーペンハウアー『意志と表象としての世界』考察 ―共苦について―
 木村麻里 人間と動物 ―イメージ表現を中心に―
 植松育哉 写真と人間の意識 ―時間の断片から生じる表象と物語―
 信太亜耶野 信仰と風水 ―生活に根付く風水思想―
 志村夏樹 ヴィトゲンシュタインにおける言語・意味・自己
 鈴木里奈 移行期における不安と選択
 田尻優美 自己形成と現代社会におけるコミュニケーション ―G・H・ミードによる自我形成と情報社会の関係―
 塚原佑介 知識の形成の過程における経験と合理性 ―科学における経験の役割―

社会法ゼミ（指導教員：中益陽子）

小川剛史 日本の障害者福祉の歴史と沿革 ―国際比較から見る今後の課題点―
 置田 純 少子化の国際比較 日仏比較
 栗山昇太 格差社会の本質を捉える ―今後の展開と対応―
 佐藤翔子 長時間労働の現状と課題
 澤田由菜 日本の高齢者医療保健制度の変遷と今後の在り方
 清水祐佑 労働時間規制緩和は労働環境をよくするか
 菅原裕也 フランスに学ぶ少子化解決策
 武澤法子 漫画の著作権と同人誌について
 立崎佑佳 労働市場における間接雇用の課題と可能性
 土居義明 生活保護の現状と課題 ―福祉事務所の実態に迫って―
 由井あすか 雇用差別・ワーク・ライフ・バランスについて考える ―両親家庭とシングルマザー、シングルファザーの家庭における違い―

生涯学習論ゼミ（指導教員：畑 潤）

海老名良太 教育の平等性について
 中島真一 環境教育論 ―体験から得る知識と精神の豊かさ―
 阿部純代 子ども読書推進活動による児童サービス充実への実践に関する研究 ―「岩手県子ども読書プラン」の実践に着目して―
 奥田恵理奈 現代社会と博物館に関する考察 ―博物館活動から現在の博物館が必要な理由を考える―
 金井亮子 高齢者の暮らしを問い直す ―ネガティブイメージを払拭して豊かに生きる―
 川上沙織 地域における子どもの居場所づくり ―児童館・学童保育・商店街の空き店舗利用の視点から―
 杉野純一 若者とは何か ―現代におけるアイデンティティへの問いと“強さ”の活路―
 常木まどか 不登校児童とメンタルフレンド活動についての考察 ―メンタルフレンドボランティアの実践を通して―
 那須 翔 障害者の自立と尊厳の確立について ―偏見と差別解消をのりこえて―
 韓みなみ 在日外国人との共生問題の研究 ―在日韓国・朝鮮人の視点から―
 福田 歩 学校と地域による教育 ―2つの視点から教育について考える―
 山内翔太 地域に根ざした社会教育を考える ―work-waku都留のまちづくり活動を通して―
 吉田琢真 人間の「学び」に関する研究 ―「遊び」と「消極教育」の可能性を考える―
 吉村成実 教育の市場化に関する考察

地域社会論ゼミ（指導教員：田中夏子）

安齋あゆみ 超高齢化社会における郊外化地域の課題と方向性について ―上野原市コモアしおつ、福島市蓬萊団地を事例として―
 飯田理恵子 地域づくりを目的とした事業体の可能性と課題 ―まちづくり企業協働運営事業「ゆいマートプロジェクト」にかかわって―
 井上侑美 地域での子どもの学習を中心としたまちづくり ―長野県佐久市岩村田寺屋塾を事例として―
 尾家野生 地域文化を活かした地域おこしの可能性と課題 ―都留市と都留文科大学との関係を事例に―
 長田由也 地域特性を活かしたものづくりと地域活性化への可能性 ―山梨県大月市を事例として―
 小鷹隼人 地域の特産品開発・販売とそれに伴う地域振興 ―埼玉県鳩山町の農業の取り組みを事例として―
 落合郁乃 自立・自律の道を歩む町のまちづくりの課題と可能性 ―福島県矢祭町を事例として―
 高柳友紀 ホームレスと住居保障：地域づくりから支援策を見出す ―静岡県菊川市の取り組みを中心として―
 中込 綾 障がいを持った人々が生きやすい地域社会とは
 藤縄史彦 古民家再生からみるまちづくり ―都留市における歴史的建造物保存のまちづくりの可能性―
 宮城正平 地域社会の教育力の再構築とその可能性

卒業論文一覧・社会科学

一沖縄県北谷町の取り組みを中心として—
武藤賀亮 青少年の育成活動がコミュニティ形成に
 どのような影響をもたらすか —スポーツを通じた
 異年齢間の関係を題材に—

地域経済論ゼミ (指導教員: 高木 正)

大島美咲 在日韓国・朝鮮人系企業の成長と地域経
 済 —大阪市生野区におけるキムチ企業を事例に—
川原佑士 東四国における徳島市の経済状況からみ
 る問題点の指摘
根本一也 日本における首都移転の有効性に関する
 一考察 —東京一極集中を世界の首都を分析しなが
 ら考える—
原田竜貴 諏訪圏工業卓越地域における行政・研究機
 関の役割 —技術・製品開発、受注獲得、人材育成—
三戸雄太 企業城下町日立の課題と展望 —日立市
 に見る一考察—

地方自治論ゼミ (指導教員: 大和田一紘)

酒井善三 広域の自治体における地方自治区につい
 て —新潟県上越市を事例に—
阿藤聖乃 農山村の活性化における特産品の必要性
 について

有馬紅実 農業農村の現状と活性化への道筋 —鹿
 児島県さつま市 (旧金峰町) を事例に—
大野至保 金沢コミュニティに基づく少子化対策の
 検証
久保貴敬 自殺の実態と隠された背景 —今後の展
 望とは—
倉井聡巳 栃木県の財政分析 —財政危機の要因は
 何か—
杉本拓也 地域の活性化、自営業と中小企業 —グ
 ローバル化の中での、地域の重要性—
野上 徹 ごみ処理に関する地方自治の比較・検証
 —大分県大分市を事例に—
藤田志織 自治体病院の現状と課題 —自治体病院
 における地域医療の確保に関して—
三沢啓一 企業の店舗開発と、地域への影響—長野
 県東御市を事例に—
山本慎一 公立大学法人化論 —公立大学法人化の
 実態と新自由主義—
吉田 翔 豊丘村の人口増加への取り組みの現状と
 課題

都市環境設計論 (指導教員: 前田昭彦)

原亜沙美 派遣切りと住まい

卒業論文一覧・比較文化学科

比較文化学科

伊香俊哉ゼミ

高田良平 戦略爆撃の効果
手塚雄太 戦後日本外交と日米安保体制
原 知沙 アメリカにおける日本人排斥
平尾朋子 在日韓国・朝鮮人の歴史と展望 —民族
 アイデンティティと共生社会
深澤あゆみ ルワンダ大虐殺
藤田貴子 日中15年戦争 —昭和天皇の戦争責任
 に焦点をあてて
星紗知子 昭和軍閥と日本ファシズム体制について
細江万里奈 ナチスが目指した第三帝国
丸山美帆 戦争と教育 —現在の平和教育資格教材
 の有効性・はだしのゲン
水石愛美 国民国家形成
向山莉奈 未決の「慰安婦」問題
佐々木千恵 美化された特攻と隊員の葛藤 —隊員
 たちは何を思いながら出撃していったのか
陳 悠未 日本の戦争犯罪および戦後補償

内山史子ゼミ

池田綾香 フィリピンと日本の歴史的関わり、フィ
 リピン人の歴史認識
伊藤麻里 観光開発 —バリの事例から
木村加菜絵 フィジーにおける民族対立 —先住民
 フィジー人と入植者インド人—
高橋芳恵 フィリピンにおける労働力輸出政策
 —フィリピン人女性エンタティナーを事例に—
瀧澤沙綾 在日外国人の子どもの環境
田村多樹子 Institutional Reform for Good

Governance: A Case Study form Bureaucracy
 in the Philippines

中里千翔 マレーシアのパームオイル産業からみる
 持続可能な開発の模索
野村明日香 タイの観光産業の発展と日本
水野美衣 タイの信仰について
柳田真紀子 上座部仏教からみるタイ
吉田千明 東南アジアにおける教育への日本の関わり

大辻千恵子ゼミ

澤田昂子 スピリチュアリティ —日本人と宗教の
 関わり—
島田裕基 日本人男性の育児休業取得 —現状と国
 際比較からの考察
高桑和規 児童労働とスポーツ —スポーツ産業の
 取り組みから見る撤廃の可能性—
武田史織 舞台芸術の天才 コジマ・ワグナー
 —バイロイト音楽祭の礎を築いた女性
藤野藍美 マンガ『サザエさん』からみる昭和の女
 性たち —良妻賢母から恐妻へ—
宮崎 遼 世界一幸せな国デンマーク —人が大切
 にされる社会のしくみ—

大森一輝ゼミ

東 恵美 アメリカ合衆国の働く女性たち
岩渕里枝 文化移民 —日本の若者は欧米で何を見
 てくるのか—
大場麻紀 欧米と日本のホームスクール —積極的
 に「学校に行かないこと」を選ぶ可能性—
岡弥 幸 裁判員制度 —誰が誰を裁くのか—
春原美咲 格差と教育

卒業論文一覧・比較文化学科

橋本くみ子 現代日本におけるDVとその対処法
—加害者へのカウンセリングを中心に—

中山阿由美 東南アジアのストリートチルドレン
—買われる子どもたち—

笠原十九司ゼミ

大久保美佑 サハリンの朝鮮人 —その歴史と現在—

佐藤利菜 台湾におけるナショナル・アイデンティ
ティの形成

桑 寧 満州事変に見る張学良の功罪 —「不抵抗」
政策の検証

程 婷婷 在日外国人子女の教育問題

中村理紗 歴史認識共有の可能性

水野友莉 日本語指導を必要とする外国人児童・生
徒に対する支援態勢を考える

楊 美娜 日本における外国人労働者の現状

—1980年代以後来日した外国人労働者を巡って—

比江島大和 十五年戦争における日本民衆の意識と行
動 —鹿児島県伊佐郡（現伊佐市）の事例を中心に—

岸 清香ゼミ

今井亮佑 「アート」になったコント —戦後日本
「お笑い」文化史とラーメンズ

大橋洋和 中国における日本動漫受容の構造 —イ
ンターネットがもたらす文化間葛藤の行方

岸 直希 葬送儀礼の文化変容 —グリーンワーク
の顕在化とエンバーミング

柴崎李恵 ポピュラー音楽をどう聴くか —野外音
楽フェスティバルと地域活性化

林ひとみ 装いというアート —「自閉の温室」を
求めるゴスロリ少女たち

八木宏紀 「ダブル」というアイデンティティを求
めて —Amer-Asian School in Okinawa の教育
にみる日本の多文化教育の可能性と限界

米山千晴 エスニック・ツーリズムと「マヤ」 —民
族織物文化の保存と日本人政府公認観光ガイド—

重富恵子ゼミ

稲葉 睦 仏領ポリネシアでの核実験における「他
者化」

宇佐美昌代 非正規労働という働き方の問題

川島育美 ボランティアツアーの実態と課題

日下可奈 市民主導の自治体環境政策に関する一考察

小山香奈 経営におけるエンパワーメントの問題

関 歩美 自治体の災害時対策 —長岡市の災害時
情報提供は外国人被災者の情報ニーズを満たせるか—

田中 円 北海道農業にとっての農業政策

鶴田淑子 科学技術と人間

中原洋平 企業の社会的責任についての考察 —中
小企業の視点から—

広瀬正英 日本の温室効果ガス排出量増加に関する
考察 —運輸部門と家庭部門を中心に—

鳥居明雄ゼミ

小田巻剛 連辞・コード・物語性 言語活動とメデ
ィアにおける修辭の様態

小野崎友美子 欧米人と日本人の歌声の違いについて

久保田美奈子 現代お笑い文化論 —お笑いフェス
ティバル「LIVE STAND」にみる現代のお笑い—

伊井 茜 戦後日本人の精神—加藤哲太郎氏の「わ
たしは貝になりたい」とその精神について

植村奈々絵 日本の化粧文化

川口真吾 Jリーグとプレミアリーグのゲーム展開・
質の違い

齊藤このみ 国旗デザイン論

佐藤麻子 恐怖

田中美緒 日本における通過儀礼 —人間の一生・
通過儀礼の意義—

塚井和華子 紅茶論

中嶋志穂 歴史教科書にみる韓国人と日本人の歴史観

宮崎可奈子 結婚式の変容

福田誠治ゼミ

池田裕子 日本と日系ブラジル人

安達 愛 在日外国人の言語教育 —スウェーデン
と日本の比較—

市川佳菜 学校教育と将来性

臼田瑛里 アート教育と子ども

大橋光樹 アメリカ社会の貧困 —学歴と職業選択
の再生産—

小俣夏希 現代における結婚の変容

神田小織 持続可能な世界遺産とは —白川郷・五
箇山合掌造り集落の問題を事例に—

齋藤理恵 スターバックス発展の秘密を探る

佐藤 彩 魅力を育てる教育を考える —シュタイ
ナー教育から学ぶ—

清水あゆ美 観光からみるバリ島 —「最後の楽園」
の誕生からもうひとつの観 光開発まで—

角屋七麻 ブランド 一定番と流行の成立—

中谷美穂子 女の旅 —多様なツーリズムとその可
能性—

廣瀬舞子 子どもの本と絵本のはたらき —世界中
で読まれている作品を通して—

分田順子ゼミ

雨宮 弘 対日／対中感情の形成とメディア —サ
ッカー・アジアカップ大会2008におけるブーイング
の背景—

植田 香 日本社会における同性愛の排除 —府中
青年の家事件(1990)から新木場事件(2006)まで—

梅垣里沙 イメージと暴動の連鎖 —フランスにお
ける移民系住民の場合—

栗原亜美 マニラのスモークマウンテンに暮らす
子どもたち —日本からの教育支援を中心に—

情野 翠 アフガニスタン復興支援の現状と課題
—NGOから見た軍民複合型支援・PRT (Provincial
Reconstruction Team) の問題点を中心に—

高林夏海 カンボジアの伝統芸能スバエク —クメ
ール・ルージュ政権下での衰退とチアン一座による
復興の動き—

館 依里 もう一つのホロコースト —ナチスによ
るロマ民族への迫害と戦後補償—

西脇綾子 民族和解をめざすボスニア・ヘルツェゴ
ビナの市民たち —コミュニティ・ガーデンにおけ

卒業論文一覧・比較文化学科

る地域社会再建の試み—

畑山彩子 スーダンにおける民族共生を目指して
—NDA (National Democratic Alliance) による
ダルフル問題打開の可能性

馬場 縁 パングラデシュにおける女性の意識変革
とエンパワーメント —マイクロクレジットの可能
性と限界—

山本芳美ゼミ

亀山菜歩 ベニズワイガニ漁をめぐる能生

高木奈緒子 キリスト教の中の天使 —絵画の視点
から

松村美樹 古代エジプトの時間感覚 — 一生涯、1
年、1週間、一日の中の生活・宗教・農業を中心に
奥村友生 戦後日本における新宗教の隆盛と似非科
学との関係 —マインド・コントロールを軸として

永井彩也乃 結髪と簪の文化史 —平安・江戸期を
中心として

田中素美 爪化粧 —その起源と機能の変化

佐々木里美 なぜ日本人はイギリスに憧れを抱くの
か —観光が創り出すイメージ

徳丸沙耶也佳 少子化対策における現代日本の結婚
—意識の変遷を中心に

林 千尋 高千穂神楽 —継承の問題を探る

古屋博基 障害者に対する日本人の差別意識 —雇
用の現場から見る改善の兆しと今後の課題

邊 英浩ゼミ

佐々木愛美 韓国・朝鮮人ハンセン病療養者

小西由希子 韓国における父系血統主義

平山智恵 アジア蔑視のナショナリズム

大沢庸子 現代中国の格差構造

研究論文・修士論文 — 文学専攻科・大学院文学研究科

文学専攻科

植村憲治先生

河本文香 算数教育における表現する能力

佐藤隆先生

清原義玄 都留市の環境教育 —持続可能性のため
の環境教育の視点から—

志村阿希奈 アニメーションの可能性

関谷美南 子どもたちの体力・運動能力向上のため
に小学校体育が果たせる役割 —体づくり運動を中
心に考える—

竹内寛明 性教育を取り巻く現状と展望

多田実恵 陰山英男の教育における一考察

鳥居潤一 子どもの貧困問題 —義務教育での格差
と取り組み—

筒井潤子先生

佐々木聖仁 スクールカウンセラーの導入とその効
果をあげる為の取り組み

大学院文学研究科

国文学専攻

牛山 恵先生

鈴木彩子 生活主義教育思想と国語教育

張 穎 小野不由美「十二国記」研究 —中国古典
文学との比較において—

寺門日出男先生

高田晶子 『古文真宝雕題』について

英語英米文学専攻

儀部直樹先生

河西玲子 Philanthropical Christianity could
not save black slaves

窪田憲子先生

小嶺亮之 The Absence of Motherhood in Lord

of the Flies.

濱谷ピアソンエロイス先生 (高橋幸雄先生)

佐藤健司 A Game-theoretical approach to the
analysis of Japanese and English conditionals

社会学地域社会研究専攻

横田 力先生

宮崎友靖 憲法学における人間像の諸相 —基本的
人権の保障から人間の安全保障へ—

比較文化専攻

鳥居明雄先生

北山 溪 「俗・共同幻想論 —棄老の幻象学—」

島津創太 「俗・共同幻想論 —マリオと共にジャ
ンプする身体—」

徳田圭右 「俗・共同幻想論 —ファンタジー小説
に見る、準日本文化的共同幻想—」

邊 英浩先生

賽汗其木格 「内モンゴルにおける砂漠化と牧畜業」

金 恵英 「満州国における日本語教育」

笠原十九司先生

米山 巡 「中国残留孤児問題 —現状と課題—」

臨床教育実践専攻

田中孝彦先生

嶋田裕子 生活と教育の結合の実践と思想の一系譜
塚原成幸 生きることの困難を抱えた子どもの理解
と臨床的援助に関する研究 —小児医療を支える発
達援助者の「語り」から

高田理孝先生 (河村茂雄先生)

吉江昭子 若手小学校教師及び教員志望学生の大学
期における職業レディネス形成に関する研究

講演会だより 地域交流研究センター・現代GP共催 第6回地域交流研究フォーラム



ようこそフィールド・ミュージアムへ！

— 人と自然をつなぐ、人と人をつなぐ
生きいきとした新しい地域社会の創造に向けて —

2月20日（土）に第6回地域交流研究フォーラム「ようこそフィールド・ミュージアムへ！ 人と自然をつなぐ、人と人をつなぐ 生きいきとした新しい地域社会の創造に向けて」が、地域交流研究センターと現代GP（環境教育GP）（註1）の共催で開催されました。都留市民、NPOスタッフ、他大学や本学の学生、本学OB、本学職員、市職員、県職員など多様な参加者101人が集い、まさに市民参加型フォーラムとして大変内容の濃いフォーラムでした。以下にその詳細を記します。

午前中は、「山・里・町をつなぐフィールド・ミュージアム」と題し、社会学科教授の前田昭彦氏の司会のもと、GPの成果報告がおこなわれました。センター長の杉本光司氏の挨拶に続き、GP取組責任者の坂田有紀子がGPの目的と概要を説明した後、各事業担当教員からそれぞれの教育活動の内容と、学生たちの成長の様子、地域連携の中で得たもの等についての報告がありました。実際にGPの教育活動に参加した学生による発表もあり、学生ならではの新鮮な視点からの発表には会場から大きな拍手が沸きおこりました。右記に午前中の

プログラムを記します。

I. 山で学ぶ

「ナデシコとカジカがいる川を子どもたちに残すために」
坂田有紀子（初等教育学科教員）

「荒廃したアカマツ林はよみがえるのか？」
泉 桂子（社会学科教員）

「ベネッセと考えた森と子どもたちの正しい関係」
白戸溪子（都留文科大学大学院生）

II. 里・町で学ぶ

「農の原体験を求めて—大学農園整備事業—」
西本勝美（初等教育学科教員）

「私たちの小さな博物館—ほんものと出会う旅のはじまり—」
北垣憲仁（地域交流研究センター教員）

III. つなぐ・はぐくむ

『カフェ』交差する空間の意匠」
高田 研（社会学科教員）

「地域を歩いて自ら学び表現する喜び・『フィールド・ノート』」
杉山由貴乃・桜井明子
（都留文科大学学生・大学院生）

昼休みには1時間半の時間をあてて、軽食を取りながら大学生や地域の方々による展示を見学し・交流を広げ深めるというカフェ形式の交流会がおこなわれました。フィールド・ミュージアム、フィールド・ノート、カジカとカワラナデシコの保全活動、大地の生き立ち学習プログラム、大学食堂における食育プロジェクト、ソローの小屋建設プロジェクト、市立図書館による展示、シオジ森の学校による「つみ木広場」、ほしのさと工房の天然酵母

パンの販売、フィールドミュージアムカフェによる「どて煮」の販売など、10団体から个性的かつ楽しく美味しい展示が出展され、来場者との活発な意見交換がおこなわれました。いずれも地域に根ざし、地域との交流を育みなが



午前中に行われたフォーラムの様子

地域交流研究センター・現代GP共催 第6回地域交流研究フォーラム

ら続けている意義のある取組で、本学の多様な地域貢献の在り方を提示するものとなりました。

午後は学生たちの企画による「フィールドミュージアムカフェ」が開催されました。詳細は下をご覧ください。

今回のフォーラムでは、「GPでどんな教育活動をおこなったか」という内容だけでなく、「その活動から何を得たのか、何を学んだのか」という点に力点をおいた発表が多く、そこには幾つかのキーワードが見られたように思います。それは、地域の隠れた魅力、魅力的な人との出会い、

新たな視点・発見、視点の広がり、人とのつながり、教え合い分かち合う、共有、共感、喜び、生き方を考えるきっかけ、というものでした。これらの根底に通じているもの、それは「地域の魅力的な自然・文化・人を知る発見の喜び」、「人とつながり地域を創る共感の喜び」なのではないかと思います。人は自然なくしては生きられない、そして人は独りでは生きてゆけない。自然とのつながりの中で、人とのつながりの中で、地域を舞台に、世代を超えて違いを越えて、教え合い学び合うことによって、豊かな人間性

(註1)

現代GPとは、社会的要請の強いテーマに関するGood practiceつまり“優れた取組”を支援する大学教育支援プログラムのことです。本学のGPは、＜持続可能な社会につながる環境教育の推進＞という分野において全国の国公私立大学81件の応募の中から選ばれました。

が涵養される。そこにフィールド・ミュージアム活動の意義があるのではないかと、今回のフォーラムを終えて感じています。

初等教育学科准教授

坂田有紀子

「第6回フィールドミュージアムカフェ in 都留文科大学」 ～顔の見える社会の再構築を ― 今度もカフェで大家族～

「カフェ」とは地域交流を目的とし、子どもから大学生、大人まで様々な世代の人々が集まって、和やかな雰囲気の中でその地域の伝統、文化や魅力を共有し、伝えていこうという試みである。今回で第6回目を迎えた。

★第一部「亀工房によるハンマードルシマーとアコースティックギターのライブ」

今回のゲストは桜の名所、長野県高遠町からお越し頂いた、亀工房さん。ピアノの先祖と言われる打弦楽器であるハンマードルシマーの澄んだ音色と、ギターのコラボレーションは、会場をほのぼのとした温かい雰囲気にさせた。曲は英国やアイルランドの民謡が主で、都留と西洋の風がぶつかり合い、独特な世界を創り上げた。心安らぐinstrumentであった。

★第二部「文大生と市民の関わりから地域社会のつながりを考える」

ゲスト：中野嘉和さん(鮮魚店フィッシュ中野)
西室陽一さん(都留文科大学理事長)

文大生と市民の関わりや現状や変化、期待等を、ゲストを始めたくさんの参加者に語ってもらった。市民の方からは、「今と比べ、下宿時代は学生同士、学生と大家さんと交流が多かった」ことや「八朔祭りの山車引き手として期待している」こと、学生からは「市民も学生を怒らなくなってきた」ことなど

複数の観点から意見が出た。最後の大幡在住市民の、「学生だけ関係性が薄れているとい

うことではなく、自己完結型の社会になってきたがために、地域社会全体として横のつながりが薄れている」という意見は、これからの地域社会としての都留における、大学の新たな役割を提起するものではないだろうか。

社会人代表 河野 格

学生の感想

今回は大学と学生、そして地域と学生のつながりについて、私自身考え直すきっかけとなった。昔は当たり前にあった“つながり”。今はないことが当たり前。どうしたら、またつながりを育んでいけるのだろうか…。 “温故知新”だと私は改めて気付かされた。元通りにすることは不可能でも、過去から学ぶことはまだまだたくさんありそうだ。カフェが、どんなに小さなつながりでも、そのつながりをこの先もつなぎ続けていけるような、また新たなつながりを生み出せるような場であり続けられるよう、形変われど、この先も続けていきたいと考えている。

社会学科3年 神谷 彩



講演会だより

国文学科・国語国文学会共催 秋季講演会

「甲州と樋口一葉」

講師：山田有策 先生

2009年11月11日(水) 国文学科・国文学会共催による秋季講演会が行われました。講師は東京学芸大学名誉教授の山田有策先生で、演題は「甲州と樋口一葉」でした。

山田先生は泉鏡花が礼賛し、幻想を抱いて描いた一葉像（泉鏡花『薄紅梅』）と実際の一葉像との比較からお話を始められました。姉御肌で色っぽい、「江戸の女」として鏡花に描かれた一葉ですが、自身の日記（山川菊栄『女二代の記—わたしの半自叙伝』『おんな二代の記』）からうかがえる一葉は、故郷・甲州を懐かしみ、また、熾烈な立身出世への憧れや文学への意志と情熱を持つ女性だったといえます。

一葉は明治28年に『に

りえ』を発表すると、周囲から「女流中ならぶ物なし」と己の虚栄心を満足させる評判がたち、「やうやう世に名をしられ初み」て「うれし」と感じる。しかしその一方で、友人や師・半井桃水から憎悪や妬みをうけ、「あやしうも心ばそうもある事かな」と恍惚と不安を同時に感じていた。「大かた物みなうつゝにかへりて、わが名わがとし、やうやう明らかになりぬ」「かゝる界に身を置きて、あけくれに見る人の一人も友といへるもなく、我れをしるもの空しきをおもへば、あやしう一人この世に生まれし心地ぞする。我れは女なり。いかにおもへることありとも、そは世に行ふべき事かあらぬか」。と、一葉自身は全く変



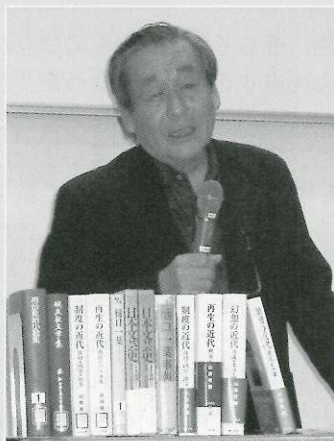
講師の山田氏

わらずとも自分の名声は浮き沈みしてしまう。一葉はその苦悩を経て社会的存在としての自己や一人の女性としての存在を認識し、実存的存在へのまなざしを持ち始めるのだと、山田先生は解説されました。

山田先生の講演を聞いて、とても印象的だったのは『にがりえ』の結末の描写の説明です。結末が描かれないことにより、クライマックスは読者に委ねられ、さまざまな解釈がうまれるということ。また、描かないということは映像にはできない、つまり文字的表現が映像的表現を超えているのだと説明されました。卒論でマンガや映画などでメディアミックスがされている作品を扱い、メディアミックスしやすいような目に浮かびやすい表現を良しとしていた私は、山田先生のお話にとっても驚き、結末の描写について深く考えるようになりました。結末の在り方について考える機会となり、一葉の作品をたくさん読んでみようと思わせてくれるすばらしい講演でした。ありがとうございました。

国文学科4年 石元みさと

講師紹介



山田有策(やまだ・ゆうさく)

1943(昭和18)年、愛知県生まれ。東京学芸大学名誉教授。日本近代文学会代表理事。おうふうから日本近代文学についての論考をまとめた、

『深層の近代：鏡花と一葉』、(2001)『幻想の近代：逍遙・美妙・柳浪』(2001)、『制度の近代：藤村・鷗外・漱石』(2003)、『再生の近代：戦後という文体』(2008)を刊行している。

講演会だより

英文学科・英語英文学会共催 秋季講演会

「ラフカディオ・ハーンの生涯」

講師：ロジャー・S・ウィリアムソン 氏

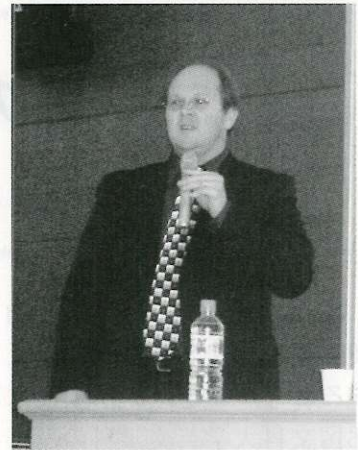
2009年11月20日に英文学会秋季講演会が開催され、北九州市立大学准教授ロジャー・ウィリアムソン先生に「The Life of Lafcadio Hearn」という題で講演して頂きました。先生はハーン自身について専門に研究されており、多くの論文を執筆なさっています。

講演を聴き、彼が決して恵まれた境遇で育ったのではなく、様々な困難を乗り越えて生きてきたのだということを知りました。

ハーンはギリシャ人の母とアイルランド人の父の間に生まれました。両親の結婚祝福されたものではなく、すぐに離婚してしまいます。その後世話をしてくれた大叔母から見放され、ハーンは19歳で1人、ニューヨークに渡ります。そこでは様々な職を

転々とし、極貧の生活を送りますが、そんな中でも独学で文学を勉強し、文章を書き、不断的努力を続けていました。彼の精神力の強さは並大抵のものではなく、彼の人生の波瀾万丈さを物語っていると思いました。

また、ハーンはその生い立ちから西洋文化に強く反発し、東洋的な異文化に共感を持つようになったということを知りました。ハーンは日本にいた間に『知られざる日本の面影』『心』などにより日本の文化や心を西洋に向けて紹介しました。日本の古くから伝わる伝説を元に自ら書き上げた『怪談』も有名です。ハーンは1877年から1887年までの10年間をニューオーリンズで過ごし、その後2年間でマルティニーク島で過ごします。ニューオーリンズで



講師のウィリアムソン氏

もマルティニーク島でも、ハーンは古くからの伝統が近代文明によって消滅していくのを目の当たりにしていました。そして消え行く文化や伝説を取材し書き残そうと努めました。それと同様に西洋的な近代化が進む明治の日本で、消えて行く日本文化を書き留めようという気持ちがあったのだと思います。

このように、ハーンは生涯にわたって西洋的な近代化の流れの中で捨て去られようとしている伝統や文化を残そうという使命感を持っていたのではないかと思います。

ハーンの精神力の強さや、伝統を伝え残そうという気持ちは私たちも忘れてはいけないことであり、彼の生涯から大切なことを学ぶことができた講演会でした。

英文学科1年 古屋智佳

講師紹介

Rodger・S・Williamson
(ロジャー・S・ウィリアムソン)

北九州市立大学外国語学部准教授
専門分野は比較文化論、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）

著書に『現代に生きるラフカディオ・ハーン』があり、その他多くのハーンに関する論文を執筆。

講演会だより

大学院英語英米文学専攻・英文学科共催 講演会

「ことばの力」

講師：松土 清 山梨県教育長

2009年11月13日(金)、山梨県教育長松土清氏をお迎えすることができた。松土氏は都留文科大学英文学科のOB。卒業後、山梨県の高校教諭となり、市川高校校長・甲府西高校長を歴任された後、昨年4月に教育長に就任された。その間、文部省の派遣でエセックス大学大学院に留学して英語教授法を研究されたり、NHK甲府支局で「ワンポイント英会話」という番組を2年半にわたり制作・出演されたりもしている。

松土さんは、私の1年先輩で、当時から目立つ存在であった。私は英米文学研究会にいたが、PESやESSの先輩方と親しくさせていただいた。しかし、松土さんとは話す機会はあまりなかった。今回お目にかかって、「松土さんは、ESSでしたか、PESでしたか」とお聞きしたところ、「一応両方に所属していました」とのことであった。松土さんは、キング牧師の公民権運動に関心があり、1年間休学して、コロラド州立大学での短期語学研修の後、米国南部ジョージア州にあるアルバニー短期大学に留学していたとのことであった。在学中われわれ二人の接点が少なかった理由が今回ようやくわかつ

たような次第。

今回の講演では、「ことばの力」というテーマのもと、英語そして教育に関わるさまざまなことを取り上げてくださり、内容は盛りだくさんであった。

英語・英語教育については、ジョークやユーモアが重要であることを講演の冒頭で実践してくれた。我々の学生時代は、そもそも英語に触れることにも努力が必要だったのであるが、ご自身が学生時代にどのように英語を勉強したかの一端も話してくださった。英語教育の題材が「強国・大国の言語」から「国際共用語」へシフトしてきており、我々が目標とすべきコミュニケーターはダライラマ14世やノルウェーのノーベル賞委員会のヤングラン委員長の英語ではないかと述べられた。英文学科が「国際学科」とか「コミュニケーション学科」に改称する例も多々あるなかで、本学は伝統的な「英文学科」を維持している。しかし内容的には「地球語としての英語」を意識していかざるを得ないのではないかと私は思った。

教育面では、少子化にともなって県内の高校の統廃合していくのが大きな仕事の一つ



講師の松土氏

であると吐露された。教育行政のトップとしては教員の仕事とは大いに異なることもあるのだろうと拝察した。既に新聞などで報道されているが、松土さんは、公務多忙のなか、小学校を中心に出前授業を精力的に行われている。山梨の教育振興プラン「ふるさとを愛し、世界に通じる人づくり」の一環としてのこのようでもあるが、なによりも教育現場が好きということのようだ。今回の講演は、「英語を話そう！世界を知ろう！」と出したハンドアウトを持参して出前授業の一部を再現してくださった。

講演後、「久々の母校でテンションが高まり、あわせて話したいことがたくさんあり、結果として早口であんな内容となってしまいました。」というメールをいただいた。母校に在籍している私としては、その言葉につけ入って、厚かましいお願いをしたい。今後は、何回かに分けて各論をお話したい。松土先輩、次もよろしく！

英文学科教授 西出公之

講演会だより

大学院英語英米文学専攻・英文学科共催 講演会

「太平洋戦争と英語禁止」

講師：大石五雄 先生

現在の日本において、英語教育が重要であることは言うまでもなく、また英語教育への期待の大きさは計り知れない。英語はインターネットや電子メール等により一般的に用いられているし、カタカナ英語は日常生活で頻繁に使われている。日本語への英語の取り込みも、またコミュニケーション手段として英語を用いることも今後ますます増えていくであろう。

12月9日に行われた成蹊大学名誉教授である大石五雄先生の講演では、「英語禁止の事実を思い起こし、それらが何によって招かれることになったかを考え、二度とそのような事態が起こらないように」という強いメッセージが語られた。

1940年、日本では太平洋戦争下において敵国語である英語を使用することが禁止された。この背景には、米英とのあつれきを生んだ日本の満州建国、国際連盟脱退、ワシントン海軍軍縮条約の破棄、ロンドン海軍軍縮条約からの脱退、虚溝橋事件、中国侵略等が複雑に絡みあった歴史があった。これらの歴史の流れを受けて、日本では米英色を一掃することを目的とし、社会のあらゆる所で英語禁止措

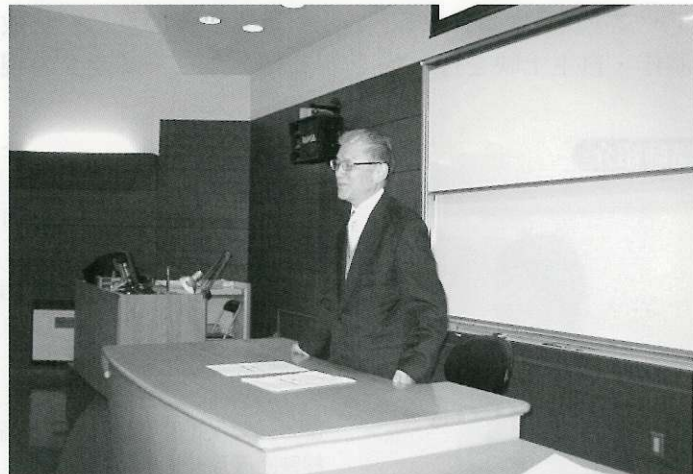
置がとられたということだ。先生は、英語禁止による日本語の名称や表示の変化、入試科目からの英語削除等、日本政府が取った政策について具体例を挙げながら詳しく説明して下さった。一方、敵国であったアメリカでは、特に軍隊において日本語学習が盛んに行われたことにより、優秀な情報部隊が活躍し、日本語が敵国の戦略を知る重要な手立てとなっていたことをお話して下さった。日米では敵国語に対する意識がまったく異なっていたのである。

英語が当たり前であるかのように生活している私たちは、過去に英語を禁止した事

実があることを歴史上のある一コマとして捉えるだけであつたり、忘れていたり、また深く省みる機会もあまりないように思える。

今回、英語禁止の歴史から明かされる教訓を学ぶことができ、これから広い視野をもって世界を眺め、さらに先を見通す目をもつことの重要性を改めて考えることが出来たように思う。「英語は言葉の武器」とはよく言われることである。この講演会の参加者は、今英語を勉強できる環境に自分自身がいることに対する大きな喜びを感じると共に、自らの成長のための武器として英語を勉強する意識を高める機会になったのではないだろうか。

大学院英語英米文学専攻 1年
藤巻由佳



講師の大石氏

成蹊大学名誉教授 『英語を禁止せよ—知られざる戦時下の日本とアメリカ』（ごま書房）著者

講演会だより

社会科学・地域社会学会共催 後期講演会

鎌仲ひとみ氏 講演会

講師：鎌仲ひとみ氏

1月20日に行われた鎌仲ひとみ氏の講演会は大盛況であった。鎌仲氏はドキュメンタリー映画作家として、現在活動をしている。イランでの劣化ウラン弾による被爆者たちを取り上げた『ヒバクシャ—世界の終わりに』や、核燃料再処理施設に建設に揺れ動く青森県の六ヶ所村を題材にした『六ヶ所村ラブソディー』が代表作だ。

彼女は大学時代を探検部の活動に費やし、卒業後はフリーの助監督として映像の世界へ入る。バリ島を舞台にして初めての自主制作を行ない、その後、文化庁の助成を受けてカナダ国立映画製作所へ渡る。1995年に帰国してからは、NHKで様々な環境や医療などのテーマを扱うようになる。自主制作・自主上映を行なっ



会場の模様

ていた際は、その資金繰りに頭を悩ませていたが、NHKのバックアップを受けたことにより、メディアを通して多くの人に見てもらうことができ、また制作費の心配も一時はなくなったという。しかし、98年に撮った『ヒバクシャ—世界の終わりに』を放映するにあたり、イラクの現状を

真実として伝えることができない、ドキュメンタリーが政治的なものに左右されてしまうということに直面する。そのため、彼女はNHKで映像を作ることを辞め、また自主制作の道に戻ったという。

イラクのラシャ・アッパース（14歳）の話は印象的であった。鎌仲氏がフリーに転向するきっかけとなった作品の中で描かれている14歳の少女であり、イラクイラン戦争の犠牲者

である。また薬は、経済政策のために治療に必要な量が届かず、痛みと闘う毎日だということであった。彼女はKAMAと呼び、慕っていた鎌仲氏に最後の力を振り絞り「私を忘れないでね」という手紙を残し、この世を去った。この話を聞いて、私たちは現実を見なければいけない、知らなければならない、と感じた。

鎌仲氏の作品は中立の立場に立って、「真実」を伝えるものばかりである。だからこそ、心に響くものであり、鎌仲氏の映像を見て知る・感じる輪が広がるのだと感じた。

社会科学2年 岡部 瞳

講師紹介



鎌仲ひとみ (かまなか・ひとみ)

1958年生まれ。ドキュメンタリー映画監督、テレビ演出家。東京工科大学メディア学部准教授。代表作『ヒバクシャ—世界の終わりに』(2003年) (文化庁映画賞文化記録映画優秀賞他多数受賞)、『エンデの遺言—根源からお金を問う』(ギャラクシー賞)など。

講演会だより

比較文化学科・比較文化学会共催 講演会

「ぼくらの時代の メディア・リテラシー」

講師：森 達也 氏



講師の森氏

2009年12月16日、「ぼくらの時代のメディア・リテラシー」をテーマにノンフィクション作家でドキュメンタリー映画監督の森達也氏を講師にお招きし、比較文化学科・比較文化学会共催講演会が開催されました。

講演では、映像メディアの歴史を踏まえながら、現在の私たちが日常的に接している、映像メディアの伝える情報の読み解き方や、インターネットを媒介とした新たなメディアの可能性と危険性についてお話を聞きました。

そして、自衛意識や安全などを理由に制度や規制に無自覚に従うことの危険と、直面する問題や物事に対し、世論やマスメディアにながされず、自分自身の意志を持つことの重要性をお話いただきました。

今回の講演で印象に残ったことは、殺人の認知件数が減ってきているにもかかわらず、新聞やテレビなどで、「凶悪犯罪の増加」といった言説が盛んに報じられ、人々は治安や自衛を理由に防犯カメラが街に溢れ、厳罰化が進んでいると、指摘されていたことです。確かに、私の身の回りでも「防犯カメラ作動中」といったステッカーや看板を、車には「防犯パトロール実施中」と

といったシールが貼られているのをよく見かけるようになりました。

そこから、知らない間に多くの人々が、根拠のないメディアの情報に影響され、自分たちの自由を束縛してしまっていることに衝撃を受けました。

同時に、メディアや、メディアに影響をうけた世論によって形成されつつある監視社会に危険を感じ、メディア・リテラシーの重要性を再認識するとともに、メディアがセンセーショナルに物事を取り上げ、世論が大きく反応するときこそ、一步距離をとり、冷静に、多面的に物事を見つめるように心がけたいと思いました。

森氏は会の後半、物事はメディアが伝えるほど一面的でなく、物事を多面的に見る力を養うことがメディアの伝える情報を読み解くうえで大切だとおっしゃられました。

また、映像メディアというのは、撮影や編集といった行為を通じて製作者側の何かしらの意図があり、決して公正中立なものではないのであって、私たちはそれらを踏まえた上で情報を取捨選択しなければならぬとおっしゃられ、改めてメディア・リテラシーの必要性和重要性を説か

れました。

最後に、教員を多く輩出する都留文科大学の学生に向け、将来教師として、ぜひ、メディア・リテラシーの大切さを、若い世代に伝えていただきたいとおっしゃられていたことが印象的でした。

講演会が終わったあと、近年急速に発達しているインターネットを媒体とした新たなメディアの可能性や危険性について、多くの学生たちが熱心に森氏に質問を投げかけていました。そこからは、若い世代のメディアに対する高い問題意識をうかがうことができました。

テレビ業界に携わり、また、映画監督として活躍されてきた森氏だからこそ伺うことができた貴重なお話は、様々な情報が行き交う現代に生き、日常的に映像メディアに接している私たちにとって非常に考えさせられるものであり、大変刺激をうけるものでした。

比較文化学会事務局

比較文化学科2年 水野大地

講師紹介

森 達也(もり・たつや)

1956年広島生まれ。ノンフィクション作家、ドキュメンタリー映画監督。著書に『放送禁止歌』（光文社知恵の森文庫）『死刑』（朝日出版社）『視点をずらす思考術』（講談社現代新書）『世界が完全に思考停止する前に』（角川文庫）など多数。映像作品に『A』『A2』（監督：森達也 製作者：安岡卓治）などがある。

講演会だより

ジェンダー研究プログラム主催 講演会

Doing Female Gender 「女をする」ということ

ートランスジェンダー・スタディーズを拓くー

講師：三橋順子 先生



三橋先生へ花束の贈呈

2009年度ジェンダープログラム運営委員会主催講演会(11月25日、2号館)では、三橋順子先生に「Doing Female Gender「女をする」ということートランスジェンダー・スタディーズを拓くー」としてお話しいただきました。感想をIさん、Mさん、Fさん、三人の学生に話し合ってもらいました。

F：三橋先生は、ご自分のことをMtF (Male to Female、男性から女性への性別移行者) だけれど性同一性障害ではないとおっしゃっていましたが、そのあたりも含めてトランスジェンダー (以下TG) の概念をもう一度確認しておきたいです。

I：MtFを例として言うと、TGの概念は、広義では「性別越境者」つまり女性の性役割をしている人で、狭義には「社会的に女性として扱われればいい」という人と考えていいと思います。狭義のTGに対してトランスセクシュアル (以下TS) っていうのは、身体上の性まで女性化させたい人のこと、と考えればと思います。

M：なるほど。先生が仰っていた「心と体のズレを埋めようとする」ってそういうこと

なんですね。つまりTGは「女をする」であって、必ずしも「女になりたい」とは限らないわけですね。そのとき、性自認に従って振る舞うことが「障害」なのか、ということですね。

F：私たちは町やテレビで男の人が女性装しているのを見ると単純に「性同一性障害」とか「オカマ」とか、特に区別もせず一括りにしていたけれどそうじゃないんですね。

M：今出てきた「性同一性障害」とか「オカマ」という言葉の区別についても話がありましたね。

I：「性同一性障害」というのは精神科の診断名で、「ニューハーフ」は異性装を売りにしている職業の名前、そして「オカマ」「オナベ」というのは蔑称なんですね。「TG」というのは比較的新しい言葉ですね。「ゲイ」や「レズビアン」は同性愛者を指す言葉で、全く定義がTGと違うものなんですね。

M：「オカマ」「オナベ」が蔑称だということ、知りませんでした。でも、そんな厳密な区別を一般の私たちも知っておくべきなのでしょうか？講演会を聞いて

てこうして話していると色々なことが分かってくるけれど、そうでなかったらなかなか難しいと思います。

I：私はできるだけ多くの人が知っておくべきだと思いますし、少なくとも、マスコミは正確に使うべきだと思います。まず言葉の区別などを端緒として、その人たちのことを理解してゆくことが大事だと思います。

F：そうですね。この世には「男」と「女」しかないという二分論的考えが浸透しているからなかなか理解が進まないのが現状、と言ったところでしょうか。

M：固定観念にとらわれてるってことですね。

I：「多くの人は見たいと思う現実しか見ない」とは誰かが言った言葉ですが、この世には「男」と「女」だけでは二分できない、色々な性の形がある事を多くの人が知っておかねばならないし、それを大人は正しく子どもたちに伝えていく必要もあるでしょうね。

ジェンダー研究プログラム運営委員会
古川裕佳

講師紹介

三橋順子(みつはし・じゅんこ)

三橋順子(性社会・文化史研究)。国際日本文化研究センター共同研究員。著書に『女装と日本人』(講談社現代新書、2008年)。

遠隔教育授業・交流プログラム

平成19年度から都留文科大学地域交流研究センターの発達援助部門での取組みの一分野として組み込まれました「地域

情報教育」プログラムにおける取組みの一つの地域小中学校との遠隔授業も、今回で5回目となりました。これまでは都留第二中学校、東桂小学校、宝小学校に遠隔会議システムを設置し遠隔授業を行ってきました。今年度は、地域交流研究センターでの備品設置支援ということで、都留文科大学附属小学校に機器一式を設置いたしました。

今回の取り組みでは、附属小学校の6年生18名が、2月26日の「六年生を送る会」で、宮沢賢治の作品『やまなし』を影絵劇として上演することが決まり、その上演に向けて、大学生たちによる指導や助言を遠隔会議システムを通して受けるというプログラムに決まりました。そこで、これまで数多くの影絵劇の上演実績をもっている、学内文化系クラブの、児童文化研究部の学生たちの協力を得ることができ、4号館の2階会議室と、附属小学校2階多目的ホールを結んだ遠隔授業を行うことになりました。

まず、2月3日の午後4時半から、附属小学校の校長先生や担当教員、児童文化研究部の学生たち、そして情報センターとの実施に向けての調整会議からスタートしました。

第1回目の遠隔授業は、2月10日の1時50分から2時35分までの授業で、「影絵とはどういうものか？」ということの子

どもたちに直接知らせたいという目的で、大学生による実際の影絵劇の上演、仕組み、色の組み合わせ方、演出法、BGMの使用法、台詞の読み方等についての学習会として行いました。主に影絵の仕組みや道具の作り方、色の組み合わせ方について質問が寄せられ、大学生たちが丁寧に説明しました。

第2回目は2月19日の3時から3時45分

遠隔授業、総合的な学習「影絵をつくろう」の実施

情報センター教授 杉本光司

まで、総合的な学習「影絵をつくろう」ということで、1回目の学習会からの後、自分たちで作った道具を使った影絵劇

『やまなし』の練習を重ねた成果として、リハーサル上演を披露し、台詞の読み方、効果音の使い方、場面転換の方法等を中心に、大学生たちから良い点、改善が必要な点等の感想やアドバイスをしてもらいました。この遠隔授業は、都留市情報教育研究会の研究授業として組み込まれましたので、市内の小中学校の情報担当教員も附属小学校に集まり、これまでにない新しい遠隔授業の様子を見守りました。

子どもたちも、「最初は緊張したけどためになった」、「離れているのにすごい」、「楽しかった」等の感想も寄せられ、また、大学生たちにとっても、「非常に貴重な経験が出来て、楽しかった」「教職を目指すのに良い経験となった」と良い時間を過ごせたようでした。今後は、このシステムの日常的な利用に向けて、子どもたちが簡単に操作することができ、他の分野の大学生の協力も得られる、新しいプログラムの開発を期待されています。



自分たちの成果の披露
(附属小学校側)



学生による演出方法の指導
(大学側)

今回の取り組みにあたり協力して頂いた方々は次の通りです(敬称略)。

都留文科大学附属小学校6年生

児童文化研究部 (吉本 愛、鷺野紗知、菊池晃成、井手佑里、山下万里子)

情報メディア演習受講生 (杉野純一、山崎拓也)

情報センター (重森 収、関戸章雄、大輪知穂)

文大だより

初等教育学科音楽専攻 卒業演奏会

卒業演奏会を終えて

初等教育学科 音楽専攻4年 若澤あゆみ

音楽専攻に入り、かつての4年生たちがあの大きな大きなうぐいすホールで、一堂々と演奏し巣立っていくのをずっと後ろから眺めてきました。ピアノに向き合い続けなければならぬ環境の中、いつかは来るその日が楽しみであり、不安であり…たくさんの想いが交差した4年間でした。

1年生の頃は、初めての一人暮らしと追われる課題の数々、なかなか馴染めない仲間たちに戸惑いながら、あっという間に過ぎてしまいました。学年責任者となり新しい仲間を迎えた二年生では、秋のコンサートでの1、2年生合同ミュージカルに悪戦苦闘しました。さらなる新しい仲間が入り、全体運営を行う3年生では、小学校での一ヶ月間の教育実習を終えてすぐの秋のコンサートにて、一つ学年が上の先輩と二台ピアノを演奏しました。責任者として約50名の専攻生をまとめなければならない苦労もありました。そして4年生。あんなにまとまりがなかった私たちの学年が、卒業演奏会という一つの目標に向かって、少しずつ、少しずつ同じ道を歩き始めたのが感じられた時の嬉しさを感じることができました。

今思うことは、ここに来るまでたくさんの経験をさせていただいたということ。そしてそれには必ず多くの人が関わっていて、皆優しく、温かく手を差し伸べてくれたということ。17年間ピアノを弾いてきましたが、こんなに真剣にピアノと向き合った4年間は初めてでした。また、伴奏者として弾くピアノの奥深さを学び、ありがたいことにプロの先生の伴奏もさせていただきました。歌をうたう喜びを、オペラや合唱、歌唱法の授業で教えられました。私はピアノ専攻ですが、春のコンサートにて二重唱をさせていただく機会にも恵まれました。お世話になった先生方、熱心なご指導をありがとうございました。

そして何より、専攻生の仲間たちと誰よりも多く触れ合うことができたという幸せ。特に同期の仲間たちには、感謝してももしきれません。自分から出ていくことはないけれど隠れた努力家

な人、勇気をもって音楽専攻の輪に入ってきた人、曲に対する想いを気づかせてくれた人、きっちり仕事をこなし私を叱ってくれた人、自分の芯をしっかりとって進むべき道を軌道修正してくれた人、最初は悩まされたけど付き合っていくうちにどんどん引き寄せられていった人、自信をもってステージに立つことの大切さを教えてくれた人、ちょっと抜けてるけどいつも私を笑顔にしてくれる人、いつも素敵な演奏で私のモチベーションを高めてくれた人、泣き虫だけど感性豊かで場を盛り上げてくれる人、ちょっとだらしないけれど音楽の楽しさや感動を与えてくれた人、同郷の安心感と女の子としての楽しさを教えてくれた人、ステージに向かう私に頑張って！と手を握ってくれた人、自分の気持ちを素直に伝えてくれてようやく4年生で仲良くなれた人、いつも友達のことを大切に想ってくれる人…同期の15人は、きっと一生忘れることはないでしょう。

最後に演奏会に来ていただいたお客様へ。音楽は演奏者だけでは成り立ちません。演奏者を支えてくれる人、そして聴いてくださる人がいて初めて成り立つものなのです。卒業演奏会当日はたくさんのお客様に演奏を聴いていただけました。あの素敵な時間を皆さまと共有できとても幸せに思います。私たち十六人十六色の想いが音楽に乗せて伝わっていれば幸いです。

この4年間で学んだ「人と触れ合う楽しさ」と「感謝のこころ」を大切に、これからの人生も私らしく生きていきます。

都留文科大学初等教育学科音楽専攻生
第43回

卒業演奏会

Planet

一部 1. 前田 祥 2. 前田 祥 3. 前田 祥 4. 前田 祥

二部 1. 前田 祥 2. 前田 祥 3. 前田 祥 4. 前田 祥

三部 1. 前田 祥 2. 前田 祥 3. 前田 祥 4. 前田 祥

四部 1. 前田 祥 2. 前田 祥 3. 前田 祥 4. 前田 祥

入場無料

日時 平成22年1月30日(土)
13:00 開演 13:30 開始

場所 都立大学大ホール 大ホール

主催 都留文科大学初等教育学科音楽研究室

文大だより

初等教育学科美術専攻 卒業制作展

卒業制作展を終えて

初等教育学科 美術専攻4年 阿部汐里

私たちが所属する初等教育学科美術専攻では、2月9日(火)～2月13日(土)の5日間、コミュニケーションホールのアートシアターにおいて卒業制作展を催しました。お蔭様で、短い会期ながら学校関係者、地域住民の皆様を合わせ376人の方が足を運んで下さり、大成功と言える形で終えることができました。

今回の展示は、主に4年次より制作を始めた作品で構成しました。各自が4年間の大学生活で学んだことの集大成として、多くの時間と労力を費やしてきた作品を、多くの方々の前で発表できたことは、私たちにとって大きな喜びでした。

また、展覧会へ向けての過程の中で、会場での配置割やパンフレットの構成などに幾度となく会議を繰り返し、各自の作品に対しての思いが真剣であればあるほど各自の希望も多く、皆で一つの展覧会を作り上げることの難しさを実感しました。そして、まずは自分の意見を持ち相手を説得できるよう努力する



筆者と作品「モザイク MOZAIKU」



卒業制作展講評会風景 西本幸子

こと、その上でお互いを尊重しあうことの大切さも学ぶことができました。

搬入は朝から集合し、後輩に手伝ってもらいながらも4年生が一丸となり1日ばかりで取り組みました。広い空間で作品の魅力を最大限引き出すことは、自分たちが思い描いていたより難しく、照明の効果や作品の飾り方など展示の仕方には皆、試行錯誤を繰り返していました。しかし、先生方のご指導のおかげで、素晴らしい展示空間を作り上げることができて、作品というものは展示次第で様々な表情を見せてくれる、つまり展示して初めて完成形となるのだ、と思いました。

搬出はスムーズに進み、半日で終わらせることができました。搬出を終え空っぽの空間を見ると、やり終えた達成感と卒業する寂しさが一度に押し寄せ、複雑な心境でした。

しかし、制作や展覧会に対してこれほどまでに一生懸命になれたこと、公の場で作品を発表できたことは、私たちにとって一生の宝物です。

来年度以降の卒業制作展にもより多くの地域住民、文大教職員、学生の皆様に美術専攻の活動の成果を見ていただきたいと心から願っています。文末ではありますが、御高覧賜りました全ての皆様と、卒業制作展に御協力頂いた美術専攻の先生方を始め学校関係者、地域の皆様に心から感謝申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

文大だより

踊りだす二人の鼓動
解き放つ光のハーモニー

都留文科大学音楽教室コンサートシリーズ No.25

「藤井隆史&白水芳枝 〈ドウオール〉」

2月3日(水)夕刻より音楽研究棟Mホールにおいて開催された「都留文科大学音楽教室コンサートシリーズ No.25 〈藤井隆史&白水芳枝 ドウオール〉」は、なかなか聴くチャンスがないピアノデュオという演奏形態や、その作品に触れることができるという期待感の中で当日を迎えた。日頃の学び舎であるホールには、抱き合わせて並べられた存在感ある2台のピアノ。ステージ上の硬質な空気がそのまま客席を包み込み、学生たちの表情にも程よい緊張が見られる中でお二人のご登場となった。

ソリストとしての演奏活動やコンクール受賞歴も数多いお二人は、東京藝術大学で学んだ後にドイツ・マンハイム音楽大学院においてピアノデュオとしての研鑽を積み、ヨーロッパ各地・アメリカ・日本での演奏活動を行い、内外コンクールにおいてデュオと

しての受賞も重ねている実力派である。演目は、幕開きに4手連弾(一台のピアノを二人で演奏)で、ブラームス「ハンガリー舞曲第1番、第5番」。次に藤井氏のソロでリスト「ため息」白水氏のソロでドビュッシー「花火(前奏曲集第Ⅱ集より)」。さらに2台ピアノによるショパン「幻想即興曲(M.グールド&B.シェフター編曲)」。同じくポーランドの作曲家ルトスワフスキ「パガニーニの主題による変奏曲」。最後にはまた4手連弾でブラームス「大学祝典序曲op.80」ラヴェル「スペイン狂詩曲より1.夜への前奏曲、4.フェリア」と魅力溢れる構成であった。

その圧倒的なテクニックに支えられた見事なまでの表現力と世界観の大きさに、最後まで惹き込まれ続けたが、加



爽やかに学生に語りかける二人

えて学生に語りかけるお二人の話しぶりがあたたかく、大きな感銘を受けた。幅広い見識や、創造性を伴う思考能力があって初めて、専門性の高さが光彩を放つのだということに、あらためて気付かされた。“踊りだす二人の鼓動、解き放つ光のハーモニー”とタイトルが付けられているお二人のCDは、レコード芸術特選版として販売されている。これからのご活躍がますます楽しみである。

初等教育学科音楽教室

教授 清水雅彦



二人のピアノデュオに客席は魅了され、最後まで惹き込まれた

文大だより

学生表彰制度を創設

— 2団体と3名を表彰 —



表彰式で記念撮影

2月26日(金)、今谷学長は、2の学生団体の代表者4名と3名の被表彰者を学長室に招き学長表彰を行いました。

この制度は、学業成績、学術研究活動、課外活動、社会活動等において優れていたと認められた学生、学生団体等を表彰するもので、本年度から実施されたものです。

栄えある初代の被表彰団体は、「第62回全日本合唱コンクール全国大会」の大学部門で金賞を受賞した合唱団と文部科学省主催「平成21年度子ども読書の日記念“子ども

読書活動推進フォーラム”」において図書活動優秀実践団体として文部科学大臣賞を受賞した児童文化研究部の2団体です。

また、個人としては、「第5回東アジア競技大会陸上競技の部」の200mにおいて3位銅メダルを獲得するなど数々の大会で入賞を果たした陸上競技部の長倉由佳さん(初等教育学科4年)、日本陸上競技選手権大会で3年連続入賞、関東学生陸上競技対抗選手権大会1600mリレー2連覇の原動力となった上田千



TV取材を受ける長倉由佳さん



合唱団のメンバー達

曉さん(初等教育学科4年)、「第31回全国国公立大学空手道選手権大会女子個人型の部」で3連覇を果たした荻原知佐さん(初等教育学科3年)の3名が表彰されました。

表彰式は、副学長を始め推薦教員等の関係者が見守るなか厳かなうちにとりおこなわれ、最後に受賞者一人ひとりから感想が述べられ「これまでの努力が認められ、頑張ってきてよかった」など受賞への思いが語られました。



今谷学長から受賞者一人ひとりへの表彰



受賞者それぞれの感想を述べた時の様子

文大だより

本学「学生チャレンジプロジェクト」 による Jazz Trainが運行



1月23日(土) 富士急行線
河口湖駅と大月駅間において、
本学「学生チャレンジプロジェクト」により都留JAZZ
倶楽部が企画立案した「Jazz Train」が運行しました。

この「学生チャレンジプロジェクト」は、本学が今年度
からの法人化を契機として、
学生が自ら企画立案した活動を
公募選考し、その企画実現
を補助する制度で、大学生活
をより充実したものになるよ

う実施しているもので
す。

今回の企画では本学
都留Jazz 倶楽部が中
心となり富士急行線の
車内と富士急ハイラン
ドなどでジャズの生演
奏会を開催したもので、富士五湖周辺の観

光客にジャズの楽しさを伝え
るとともに地域のイメージア
ップを図ることを目的として
実施されました。また、この
活動は本学学生の地域貢献活



動の一環としても地元メディ
アからも注目を集めました。

企画責任者であるの社会学
科2年酒井辰雄さんによれば
「車内は予想以上に揺れが激
しく、電車酔いしてしまい演
奏中も気分が悪く大変でし
た。」とのことで、ジャズ演
奏に魅了された乗客ととも
に、走る車内での演奏には同
倶楽部メンバーも演奏に酔う
こととなりました。

この学生チャレンジプロジ
ェクトによる活動企画には、
今後も様々な活動が企画さ
れ、多くの学生が参加するこ
とが期待されています。



乗客は軽快なジャズに魅了された

山梨の魅力メッセンジャー 68名に認定証交付

1月27日(水) 本学2号館
101教室において、平成21年
度山梨の魅力メッセンジャー
制度認定証の交付式が今谷明
学長、田中夏子社会学科教授
など大学関係者の見守る中で

開催されました。

山梨県知事からの認定者は、
本学の地域交流研究Ⅲなどの
講座や実習を履修し山梨の魅
力について学んだ68名の全
学科学生で、社会学科環境・

コミュニティ創造専攻1年生
の伊藤愛さんが代表し山梨県
観光部山田幸子次長より同認
定証の交付を受けました。

このメッセンジャー制度は、
山梨県が県内の大学などに長
期滞在する学生を対象に、講
義と現地視察を通じて山梨の
魅力を学び、卒業後も山梨フ
ァンとして山梨の魅力を県外
に積極的に伝えていくことを
目的としており、認定された
68名が、今後は本学と周辺
地域や県外地域との交流を深
める架け橋として一躍を担う
こととなります。



会場の様子



認定証の交付

文大だより

文大名画座

～ 名画の上映とトーク第7弾 ～

今回で7シリーズ目となる「文大名画座」は、本学教員のお薦め映画を上映し、教員自身がその作品への思いを語る公開講座で、市民からは大学の教員を身近に感じられ、懐かしい映画や見逃した映画が市内で見られるとして親しまれています。

今年度の開催は年末となったことから、担当教員も市民も忙しい時期となったため開催期間を2週間に集中させました。上映作品は12月9日第1回目、重富恵子比較文化学科講師解説の「ナチョ・リブレ覆面



第1回目講師の重富恵子講師



第2回目講師の菊池信輝准教授

の神様」、12月14日第2回目は菊池信輝社会学科准教授解説「ラウンド・ミッドナイト」、12月16日第3回目は鳥原正敏初等教育学科准教授解説「マンマ・ミーア!」、12月18日最終回は阿毛久芳国文学科教授解説「イル・ポステイーノ」で、師走の冷えこむ夜間にもかかわらず多くの市民が訪れ映画の魅力を堪能しました。

キャリアサポート室主催 学内合同企業説明会開催

1月26日(火) 本学3号館2階ロビーにおいて本学キャリアサポート室主催の学内合同企業説明会が開催されました。今回は東日本電信電話㈱や東日本旅客鉄道㈱、東京海上日動火災保険㈱、ワタミフードサービス㈱など県内外の優良企業17社が各部ブースに分かれ、本学3年生を中心に各

企業の求める人材などについて人事担当者からの意見交換が行われました。

同室担当者は「今回のように首都圏の企業ばかりではなく、全国展開している企業を招いた説明会も開催しているので、地方での就職を希望する学生はこのような説明会に積極的に参加し、情報収集を

してほしい。」とのことで、全国的に企業への就職が厳しい時代であるため、就職へのサポート体制を更に強化していきたいとのことであった。



企業の説明を熱心に聞く学生達

お知らせ 国立科学博物館主催「大哺乳類展」へ本学協賛

3月13日(土) から東京上野・国立科学博物館において開催中の「大哺乳類展－陸のなかまたち－」に本学が特別協賛団体として参加しています。

当企画は本学名誉教授の今泉吉晴氏が監修者となり開催されることから、本学地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム部門が展示協力しており、会場内の特設展示コーナーには本学のフィールド・ミュージアムへの取組展示や大学案内冊子なども置かれ本学の情報発信の場として注目されています。

展示期間は今年6月13日(日) までとなっているため、近隣にお出かけの際には会場へお立ち寄りお願いいたします。



©1986 Panda symbol WWF® WWF® is WWF Registered Trademark

編集後記

高橋宏幸

はすべからく効能の面を見ぬかねばならん」(『竜馬がゆく』) ということで、これからの大学を創っていきたい。

一昔以上前になるが、大学の予算編成の自主を考え、あれこれ模索したことがあった。大学運営の基本は人も大事であるが、予算である。それが思うように運用できなければあれこれ企画立案しても萎んでしまうのである。花を咲かせるため、予算をその時その時の大学の方針に沿って重点化あるいは臨機応変に運用できれば、国立大学のような親方日の丸でもなく、私立大学のような自主努力できる位置付けでもない、生かさず殺さずのような中途半端な位置にあった公立大学が、もっと発展するための様々な対策を実施することができるようになるだろうと考えたからである。だから、今回法人化してのメリットの一つは予算編成権が大学にあることだと考えている。その具体的な例としては、研究費項目が多様化したことや広報活動がしやすくなった点である。教育界ではかなり名が知られており、また受験生を集めるための施策の予算はそれなりにあったが、学生の就職活動において、卒業生が出身大学を誇りに感じるよう世間的に本学の知名度を上げることが大事だと思う。その広告費が予算項目として立てられるようになったことでリクルートの進学ネットに大学の情報を詳しく載せたり、大哺乳類展を協賛したりすることができたのである。また各種研究交付金により先生方の業績が上がり教育に反映し結果として都留文科大学の名を広めることにつながれば、これまた一石三鳥の予算ということになる。法人化をポジティブに考えたい。



インフォメーション



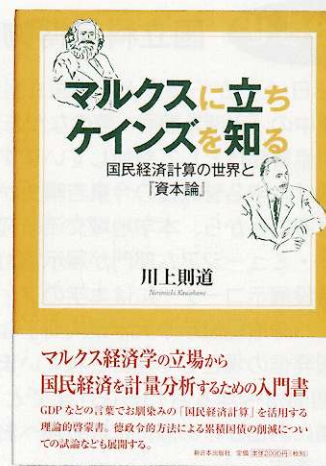
**フィールド・ミュージアム
編集部からのお知らせ**

本学地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム編集部が文部科学省現代GP事業により「フィールド・キャンパスだより」教材コラムを抜粋編集した「先生の卵たちに贈る教材集 自然を楽しむ40のヒント」を発行しました。興味のある学生には配布しますのでお申し出ください。

**マルクスに立ち
ケインズを知る**
国民経済計算の世界と『資本論』

川上則道／著
2009年9月出版
新日本出版社
2,000円＋税

◇かわかみのりみち
本学名誉教授



**本
ぶんだい堂**